

ISSN 0917-8880

英語英米文学論集

第35号 2026

安田女子大学英語英米文学会

英語英米文学論集

Journal of English Language and Literature

安田女子大学英語英米文学会
English Language and Literature Society,
Yasuda Women's University

目 次

焦点移動の連続適用一文の傾斜とバランスー ……杉 山 正 二	1
人間はどこまで動物なのか ……青 木 克 仁	21
「虚構世界」と「現実世界」：小説を読む行為と 異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (19) ——女性と共感・Bridget Jones との30年—— ……青 木 順 子	41
コロナ禍における英語学習と留学： 2名のライフストーリー ……山 川 健 一	69

執筆者紹介

活動報告, 投稿規定

学会会則

焦点移動の連続適用 一文の傾斜とバランス

杉山正二

Abstract

In this paper, I would like to reconsider rule incompatibility phenomenon, that is, the impossible application of two independent focus movements such as heavy NP shift and wh-movement in a sentence, from the viewpoint of new framework of Balance Theory. Through the discussion, it will be shown that the basic four types of rule incompatibility phenomenon can be explained naturally as a consequence of both End-Weight Principle and Top-Weight Principle. In order to assure the status of less acceptable cases, however, we have to appeal to the difference of the total weight between ungrammatical cases and subtle cases. In a sense, this phenomenon appears to be the most representative case to demonstrate the effect of the balance notion in the grammar of English.

1. 序論

以下の対比が示すように、たとえ単独では可能な焦点移動 (focus movement) であっても、一つの文において連続して適用されると非文と判断される。例えば、(1a) は右方移動の重名詞句移動 (heavy NP shift = HNPS)、(1b) は左方移動の wh 移動 (wh movement) がそれぞれ適用された例であるが、(2) から明らかのように二つの移動の連続適用は許されない。このような現象は規則非両立現象 (rule incompatibility phenomenon) と呼ばれ、多くの注目を集めてきた。

- (1) a. John gave t_i to Mary [_{NP} the picture of Mt. Fuji].
 b. Who_i did John give [_{NP} the picture of Mt. Fuji]_i [_{PP} to t_i]?

(2) a. *Which library_i did you steal t_j [_{PP} from t_i]_{[NP} an autographed copy of *Syntactic Structures*]_j? (Fodor, 1978:449)

b. *Who_i did John give t_j [_{PP} to t_j]_{[NP} the picture that was hanging on the wall]_i? (Wexler & Culicover, 1980:279)

情報構造 (information structure) の観点からは「一つの文には一つの焦点」という一般的制約が課されているため、(2) のような多重焦点 (multiple foci) は基本的に許されないと説明される¹⁾。ところが、複数の焦点移動が適用されているにもかかわらず容認されるという不思議な事例が観察されている。杉山 (1999a, b) ではバランス理論 (Balance Theory) の初期モデルでこの現象を説明したが、本稿では、杉山 (2019, 2020, 2021) で提案された新モデルの枠組み (若干の修正あり) に基づいてこの現象を再考する。

2. 焦点の総重量

さて、健全な言語分析を遂行するには、階層構造 (hierarchical structure) で表される内部構造 (internal structure) と、情報の自然な流れ (the natural flow of information) を反映する情報構造の二つの観点、つまり形式 (form) と機能 (function) という二つの視座が不可欠となる。バランス理論は階層構造の違いに情報構造を反映させた「傾斜構造」 (inclination structure) という抽象構造を設定し、構造の安定性という概念を用いて語順 (word order) や移動の動機づけ、そして段階的な文法性 (degrees of grammaticality) を説明することを目標としている。この理論で中心的役割を果たす概念が (1) の焦点 (focus) と (2) の傾斜 (inclination) である。

(1) 焦点: 文中で最も重要な情報を含む要素であると同時に、最も重たい要素で

¹⁾ 代表的な焦点制約としては以下のものが挙げられる。

(i) The One New Idea Constraint

There are no constructions internal to an intonation unit with two items that independently express new information. (Chafe, 1994:116)

ある。 (杉山, 1999:26)

(2) 文の傾斜：焦点が文のX端に位置すると、その文はX方向に傾斜する

(X = 右 or 左)。 (杉山, 1999:28)

バランス理論では、焦点要素は情報価値が高い分、つまり情報量が重たい分、物理的な重さも増すと仮定する。ここで重要なことは、「重さ」という目に見えない尺度によって (2) に示した「傾斜」というイメージが必然的に生まれることである。次に、自然言語には「バランスのとれた安定状態」という認知上の基準が備わっており、移動は安定状態を確保する「最後の手段」(the last resort) としてのみ駆動されると仮定する。核となる原則は二つ想定されており、一つは平叙文が従う (3) の文末重心の原則 (End-Weight Principle) であり、もう一つは wh 疑問文が従う (4) の文頭重心の原則 (Top-Weight Principle) である。

(3) 文末重心の原則：英語の平叙文は、右下降傾斜、つまり、焦点が文末にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：4点 \leq 焦点の総重量 (潜在的重量+焦点度重量+ α) \leq 5点

(4) 文頭重心の原則：英語の wh 疑問文は、左下降傾斜、つまり、焦点が文頭にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：wh 句焦点の総重量 (潜在的重量+焦点度重量+ α) = 5点

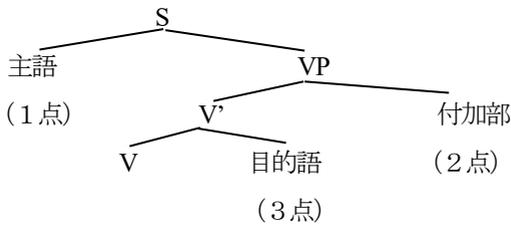
(杉山, 2021:32, 35)

この対極をなす二つの原則において共通する鍵概念は、焦点の総重量を構成する「潜在的重量 (potential weight)」と「焦点度重量 (focus weight)」である。潜在的重量とは、表層構造 (surface structure) で焦点が付与される前のレベル、つまり深層構造 (deep structure) で主要構成素 (major constituent) が内在的に持つ重量を指し、以下のように階層構造上の相対的な位置関係に基づいて決定される。

- (5) 階層構造上の位置と潜在的重量の相対的關係：階層構造上、下位に生成される構成素ほどその潜在的重量が増す。(杉山, 1999:45)

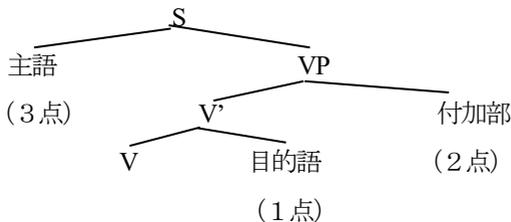
主要構成素とは、文中の主語 (subject)、目的語 (object)、付加部 (adjunct) を指し、それぞれの潜在的重量は階層構造上の高さに応じて以下のように得点化される。下位ほど潜在的重量が重くなると仮定される。

- (6) 潜在的重量



一方、焦点化重量は、表層において実際に焦点として解釈される要素に付与される。潜在的重量の軽い要素ほど有標の焦点 (marked focus) としての解釈が強まるため、付与される焦点度重量も相対的に増加していく。したがって、焦点度重量は無標の焦点 (unmarked focus) である目的語が1点、付加部が2点、そして主語が3点という具合に潜在的重量に反比例して重たくなる。

- (7) 焦点度重量



さらに右方焦点移動の代表例である HNPS の場合、動詞の目的語という無標の位置から文末という有標の位置に移動させなければならないので、有標の焦点度として当該目的語に1点が加算されると設定する。ここまでの仮定に従うと、HNPS が適用された文は、以下のような右下降傾斜を形成することになる。下線部と○は文中における焦点を表す。

(8) a. John gave t_i to Mary [NP the picture of Mt. Fuji].



(総重量: 潜在的重量3点+焦点度重量1点+有標の焦点度1点 = 5点)

この構造は焦点の総重量が5点となるため、(3)の文末重心の原則を満たす合法的な構造として認可される。

一方、左方焦点移動の代表例である wh 疑問文の場合、wh 句は文末に傾斜した平叙文の安定構造を左方向に逆転させるという「情報の自然な流れ」に逆行する働きを担うことから、通常の焦点度重量に加えて wh 焦点度として1点が加算されると仮定する。その仮定に従うと、動詞の目的語を wh 句に置き換えた場合、最終的に以下のような傾斜構造が形成されることになる。

(9) a. What $_i$ did John write t_i ?



(総重量: 潜在的重量3点+焦点度重量1点+wh 焦点度1点=5点)

wh 移動の適用を受ける焦点の総重量が5点と計算されるので、この構造は(4)の文頭重心の原則を満たし、適格性が保証される。それでは次節で典型的な規則非両立現象をバランス理論の新モデルの視点から考察してみよう。

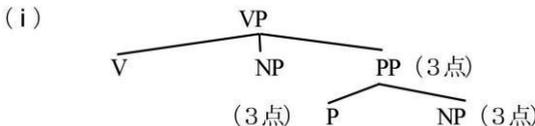
3. 規則非両立現象

本稿で議論する規則非両立現象は以下の四つのタイプに分類される。第一は、既に序論で挙げたもので、右方焦点移動と左方焦点移動がそれぞれ別々の構成素に適用されるタイプである。以下の (1c) では、右方移動として動詞の目的語の HNPS が、そして左方移動として動詞の補部 PP 内に生じた前置詞の目的語の wh 移動がそれぞれ適用され、破綻している。

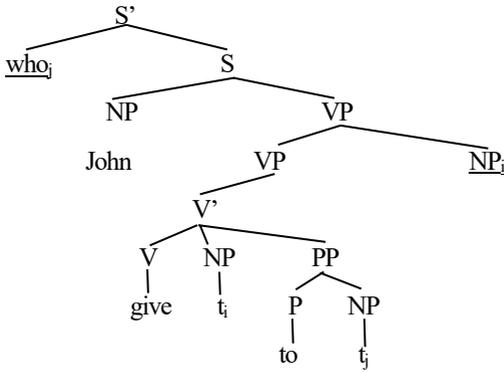
- (1) a. John gave t_i to Mary [_{NP} the picture of Mt. Fuji].
 b. Who_i did John give [_{NP} the picture of Mt. Fuji] [_{PP} to t_i]?
 c. *Who_i did John give t_i [_{PP} to t_j][_{NP} the picture of Mt. Fuji]?

wh 句の総重量は 5 点 (潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + wh 焦点度 1 点) であり、重名詞句の総重量も 5 点 (潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + 有標の焦点度 1 点) と計算される²⁾。ここで、文頭を占める wh 句の総重量から文末の重名詞句の総重量を引いた重量が最終的に wh 疑問文の傾斜を決定する重量としてカウントされると仮定すると、wh 句の当該重量は $5 - 5 = 0$ 点となる。その結果、傾斜図の (2b) が示すように、(1c) の wh 疑問文は左右平衡状態の傾斜となり、文頭重心の安定状態が得られず、排除される

²⁾ 杉山 (2021) で提案したように、与格構文に生起する文末の PP は V に選択制限されることから、V 補部の場合にのみ最大投射範疇 (maximal projection) である PP の潜在的重量 3 点が主要部 P に浸透し、P の補部は P の姉妹であることから、やはり潜在的重量 3 点を担うと考えておく。なお、潜在的重量が 3 点の要素の焦点化重量が 1 点となることは動詞の目的語の場合と同じである。



(2) a.



b. ○ ————— ○
 (who_i: 5点) (NP_i: 5点)

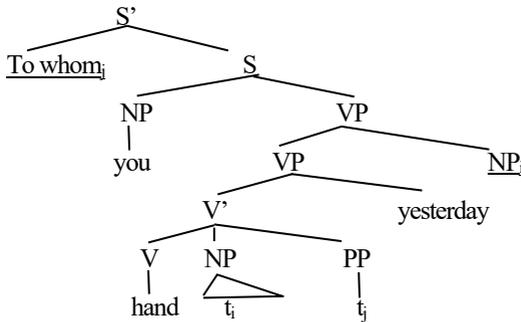
同じく移動規則がそれぞれ別々の構成素に適用される場合として、右方移動として目的語内の補部 PP に外置化 (extraposition) が適用され、左方移動として動詞の補部 PP が wh 移動の適用を受けたケースを見てみよう。

(3) *[_{PP} To whom]_i did you hand [_{NP} a letter t_i] t_j yesterday [_{PP} to the teacher]_i?
 (中島, 1984:183)

この場合も、文頭の wh 句は総重量が 5 点 (潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + wh 焦点度 1 点) であるのに対し、文末 PP の総重量も 5 点 (潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + 有標の焦点度 1 点) となる³⁾。その結果、(4b) のように、文の傾斜が平衡状態となり、この wh 疑問文は文頭重心の原則が求める安定状態に至らず構造は破綻する。

³⁾ 注 2 で述べたように、目的語 NP は V 補部の領域であるため、最大投射範疇である NP が支配する要素は、NP の潜在的重量 3 点を共有する。

(4) a.



b. ○ ————— ○
 (To whom_i: 5点) (NP_i: 5点)

第二は、一旦、右方焦点移動を受けた構成素から、今度はその内部の要素を wh 句として左方向に取り出すケースである。(5) は HNPS と wh 移動が両立しないことを示している。

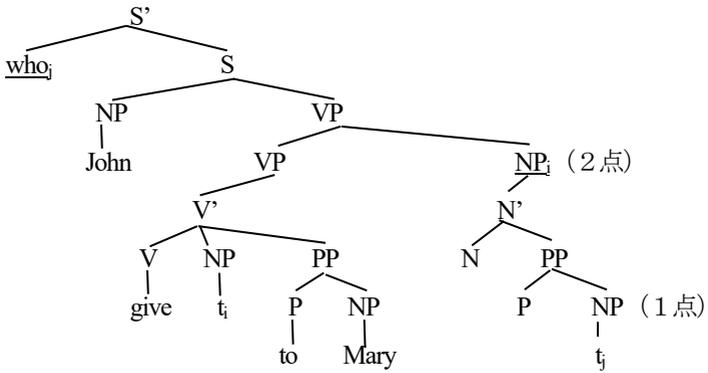
(5) a. John gave t_i to Mary [_{NP} a picture of Nixon]_i.

b. *Who_j did John give t_i to Mary [_{NP} a picture of t_j]_i?

(Culicover & Wilkins, 1984:253)

既に述べたように、HNPS を受けた NP の総重量は確かに5点であるが、この NP は VP に付加されるため、文末の NP 内部から wh 移動を受ける際は、一旦振り出しに戻って通常の付加部 (潜在的重量2点領域) からの取り出しと同じ扱いを受けると仮定する。さらに、当該 NP はもはや V の補部領域にないため、第一の事例と異なり、この NP の潜在的重量がその内部の要素に共有されることはなく、NP に支配される PP の目的語の潜在的重量は半分の1点となり、焦点度重量も PP の半分、つまり1点になると仮定する。

(6) a.



b. 
(who_i: 3点)

この計算が妥当だとすると、文頭の wh 句の総重量は3点（潜在的重量1点+焦点度重量1点+wh 焦点度1点）となり、文頭重心の原則が要求する5点に及ばず破綻することが正しく導かれる。

次に、主語からの外置化と wh 移動の非両立を検証する。

(7) a. [The fact t_i] amazed Fred [that Max saw X]_i

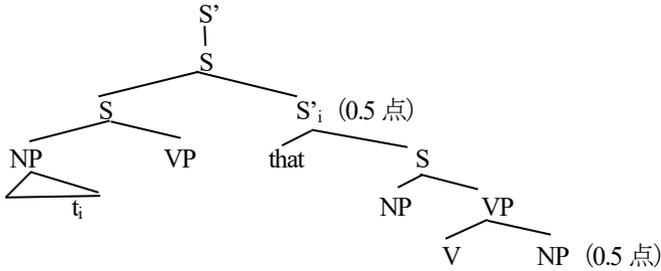
b. *Who_i did [the fact t_i] amazed Fred [that Max saw t_j]_i? (Fiengo, 1980:153)

先ず主語から外置化される節の総重量は5点となる。なぜなら、(7a)の外置化節はNの同格節 (appositive clause) であることから、Nと同じ潜在的重量1点を持ち、そこに焦点度重量3点、有標の焦点度1点が加算されるためである。ただし、主語からの外置化要素はVPではなくSに付加される、つまり主語よりも階層構造上、高い位置を占めるため、その潜在的重量は主語よりも軽くなる。そこで、ここでは主語の半分の0.5点と設定する⁴⁾。さらに、(5)のHNPSのケースと同様に、当該

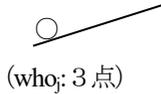
⁴⁾ 外置化節内の主節動詞の補部NPも、外置化節全体と同じ潜在的重量の0.5点を共有する。

要素の焦点度重量も主語の半分の 1.5 点と設定する。wh 焦点度はどの要素も 1 点なので、最終的な wh 句の総重量は 3 点となる。

(8) a.



b.



したがって、(7a) の wh 疑問文は文頭重心の原則から逸脱した傾斜しか形成できないため正しく排除される。以上、付加部条件 (adjunct condition) が予測する現象は、文頭の wh 句が重量不足に陥っているという理由で体系的に説明されることを主張した⁵⁾。

第三は、二つの独立した右方移動がそれぞれ別々の構成素に適用されるケースである。以下の (9) では、直接目的語の HNPS と動詞の補部である PP 内の名詞句から関係節の外置化が行われている。また、(9a) と (9b) の結果から、HNPS と外

(9) a. *I gave t_i to [_{NP} a student t_j] yesterday [who didn't have much money]_j [_{NP} a copy of LGB]_j

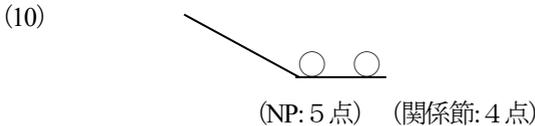
b. *I gave t_i to [_{NP} a student t_j] yesterday [_{NP} a copy of LGB]_j [who didn't have much money]_j (cf. Nakajima, 1992:317)

⁵⁾ 付加部条件の典型的な違反例は以下のようなものである。

(i) *Who_i did the government collapse [after the downfall of t_i]?

(Radford, 1988:487)

置化の着地点 (landing site) を逆にしても結果に差がないことがわかる⁶⁾。この場合の非文法性は、文末に配置される焦点が複数存在していることが原因として考えられる。ここで (9a) の傾斜図である (10) を見てみよう。



外置化された関係節の総重量は4点 (潜在的重量2点+焦点度重量1点+有標の焦点度1点) となる⁷⁾。一方、HNPSを受けたNPの総重量は5点 (潜在的重量3点+焦点度重量1点+有標の焦点度1点) となる。文末重心の原則を満たす焦点の得点は4点以上5点以下と設定されているので、両者を合わせた9点は明らかに重量オーバーである。同様に (9b) も文末位置が重量過多により排除される。

第四は、上とは逆に、二つの左方移動がそれぞれ別々の構成素に適用される場合である。(11)の非文法性は、wh移動の適用順序に関係なく、二つの明示的なwh

⁶⁾ (9a) と (9b) のあいだに文法性の差がないという事実から、HNPS と外置化の交差 (crossing) の有無は文法性に直接影響を与えないことがわかる。なお、(iii) が容認されないのは、二つの焦点移動が絡むからではなく、そもそも間接目的語からの外置化が許されないからである。

(i) *I gave t_i to [NP a student t_j] yesterday [who ...]_j [NP a copy of LGB]_i

(ii) *I gave t_i to [NP a student t_j] yesterday [NP a copy of LGB]_i [who ...]_j

(iii) *I gave [NP a student t_j] t_i yesterday [NP a copy of LGB]_i [who ...]_j

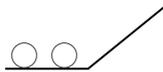
⁷⁾ V 補部の NP の潜在的重量は3点であり、その主要部と補部も3点を共有するが、Nの付加部は階層構造上、上位に生成されるので潜在的重量は2点とカウントされる。

移動が適用されないことを示している⁸⁾。この場合は、文頭に配置される焦点が重量オーバーを引き起こすことが非文法性的の原因として考えられる。

(11) a. *Who_i what_i did you give t_i to t_j ?

b. *What_i who_j did you give t_i to t_j ? (cf. Lasnik & Saito, 1992:2)

(12)



(who: 5点) (what: 5点)

先頭のwh句の総重量は5点(潜在的重量3点+焦点度重量1点+wh焦点度1点)、一方、二番目のwh句の総重量も5点(潜在的重量3点+焦点度重量1点+wh焦点度1点)となる。文頭重心の原則を満たす焦点の得点は5点に設定されているので、両者を合わせた10点は大幅な重量超過となり、この構造は破綻する。

以上、焦点移動の種類、方向に関係なく、二つの独立した焦点移動の連続適用の禁止がバランス理論による文末重心の原則と文頭重心の原則の相乗効果によって説明可能であることを主張した。

4. 反例と解決案

さて、第2節でも述べたように、基本的に「一つの文には一つの焦点」という情報構造上の原則が成立するため、複数の焦点移動規則が両立しないのは当然の結果と言えるが、それにも関わらず容認可能となる微妙な事例が観察されている。ただし、それらの事例に対して、全く容認不可能と判断する母語話者が存在することも事実である。そこで本節では、当該構造はマージナルな資格を持つ構造、つまりグ

⁸⁾ 一つの文中に複数の疑問の焦点が存在する多重wh疑問文(multiple wh question)の場合、文頭と文末にwh句が配置されなければならない。

(i) a. What_i did you give t_i to whom?

b. *Who_i did you give what to t_i? (Fiengo, 1980:123)

杉山(2024)では、この構文の適格性は「傾斜平衡の原則」に従うことを主張した。

レイズーンに属する現象として扱うことにする。

第一の事例は、主語 NP の内部からの PP 外置化と、動詞の補部 PP 内からの wh 移動が共存している事例である。

(1) [Which newspaper]_i did [_{NP}a review t_j] appear in t_i [_{PP} of that new book by Fred]_j ?

(Wexler & Culicover, 1980:337)

主語 NP から外置化された PP は主要部 N の補部であることから、総重量は5点 (潜在的重量1点+焦点度重量3点+有標の焦点度1点) となる。一方、文頭の wh 句の総重量も5点 (潜在的重量3点+焦点度重量1点+wh 焦点度1点) となり、文末重心の傾斜が得られないという結果になる。

(2) ○————○

(wh_i: 5点) (PP: 5点)

実際、(1) を認めない話者にとっては予測通りの結果となる。しかし、この構造を容認する話者はどのようにこの構造の傾斜を認知しているのだろうか。(1) を文法的と判断する話者にとっては、この構造が文頭重心の原則に従っているように認知されるという仮定に立つと、文末の PP はもはや焦点要素ではなく、基底の段階から文末に生成された付加部として解釈していると予想される。

(3) [_{NP}A review] appear in X newspaper [_{PP} of that new book by Fred].

この段階から X newspaper を wh 句として文頭に移動すれば、文頭重心の原則に適合する wh 疑問文が派生されることになる。つまり、「一つの文には一つの焦点」という大原則に忠実な話者は文頭の wh 句のみを唯一の焦点として認知し、文末の PP は焦点と捉えていないと考えられる。

第二の問題は、主語 NP と目的語 NP からそれぞれ関係節の外置化が適用されている事例である。

- (4) [_{NP}No one t_i] puts [_{NP}things t_j] in the sink [that would block it]_i [who wants to go on being a friend of mine]_j.
(Fodor, 1978:452)

関係節は N の付加部に生成されるため、N 補部よりも潜在的重量が軽くなり、抽出領域が主語か目的語かによっても相対的に異なる⁹⁾。先ず、主語 NP からの外置化要素の総重量は4%点（潜在的重量%点+焦点度重量3点+有標の焦点度1点）となる。一方、目的語 NP からの外置化要素の総重量は5点（潜在的重量2点+焦点度重量2点+有標の焦点度1点）となる。すると、両者の合計は5点を大幅に超過するので、文末重心の原則に対する違反が発生する。しかしながら、(4) を容認する話者は上で述べたように、「一つの文には一つの焦点」という大原則を優先させるため、(4) の焦点は文末の[who wants to go on being a friend of mine]のみと考え、この文は文末重心の原則に合致した構造と認知すると考えられる。

第三の問題は、wh 句が前置詞残留 (preposition stranding) ではなく、前置詞の随伴 (pied-piping) を適用すると文法性が向上することである。

- (5) a. *Who_i did you tell t_j to t_i yesterday [_{NP} the story about Mary]_i?
b. [_{PP} To whom]_i did you tell t_j t_i yesterday [_{NP} the story about Mary]_i?
(中島, 1984:38)

素直に考えれば、前置詞残留を含む (5a) は解釈に行き詰まることが最大の原因であろう。文頭の who と最初の痕跡 t_j の関係が先に結び付くからである。バランス理論では、(5a) は文頭の wh 句と文末の NP の総重量が等しくなるから排除される

⁹⁾ 主語 NP の潜在的重量は1点であり、主要部と補部も1点を共有するが、N 付加部の潜在的重量は%点となる。目的語 NP 内の付加部の潜在的重量は注6を参照。

と原理的に説明される。以下に示すように、先頭の **wh** 句の総重量は5点（潜在的重量3点+焦点度重量1+**wh** 焦点度1点）であるのに対し、文末に移動する NP の総重量も5点（潜在的重量3点+焦点度重量1点+有標の焦点度1点）となり、左方向への傾斜が得られないことがわかる。

(6) ○ ○
 └────────┘
 (who: 5点) (NP: 5点)

ところが、(5b) の傾斜も全く同じになるので、我々は両者の区別をすることができなくなる。以下の (7) は (5b) の傾斜である。

(7) ○ ○
 └────────┘
 (To whom: 5点) (NP: 5点)

このジレンマを解決するために、もう一度 (5a) と (5b) を比較すると、やはり両者のあいだには前置詞残留か前置詞随伴かの違いしかないことに行き着く。そこで母語話者の中に、前置詞残留と前置詞随伴のあいだで重量の差を認めないグループと、両者のあいだに微妙な重量の差を認めるグループが存在すると仮定してみる。もしその仮定が正しいとすると、前者のグループは (5a) と (5b) を同等に文頭重心の原則に対する違反であると判断を下すのに対して、後者のグループは NP を直接支配する PP の方が NP よりも潜在的重量が重たいと捉え、(5a) の傾斜よりも (5b) の傾斜の方が違反の度合いが少ないと判断し、若干文法性が向上すると考えることができる¹⁰⁾。

最後の問題は、**wh** 移動を受けた構成素から、その中の一部を右方移動させても文法的となる事例である。例えば、(8a) は文頭に移動した **wh** 句から付加部の PP

¹⁰⁾ 実際、単独の前置詞残留と前置詞随伴を比較すると、前者はより口語体であり、形式上は後者が選択されるという事実も、後者の方が構造として安定していることを示唆している。

を、そして (8b) と (8c) は文頭に移動した wh 句から付加部の関係節をそれぞれ文末に移動させている¹¹⁾。

- (8) a. [Who t_i] do you know t_i [_{PP} with blue eyes] $_j$? (Winkler, 1997:205)
 b. [Which packages t_j] will you say that John mailed t_i tomorrow [which haven't been sealed yet] $_j$? (Williams, 1981:74)
 c. [Which photograph t_j] did Bill admire t_i [that Mary hadn't seen] $_j$? (Freidin, 2012:184)

ここで (8c) の外置化前の構造を考えると、(9b) のような傾斜になり、文頭重心の原則を遵守していることは確かであるが、直感的に見ても (9a) の構造は文頭過多であり、いかにもバランスが悪い。文頭の wh 句から関係節の外置化を適用するとスリムになるのは明らかである。

- (9) a. [Which photograph [that Mary hadn't seen]] did Bill admire t_i ?
 b.



まず文頭の wh 句の総重量は5点 (潜在的重量3点+焦点度重量1点+wh 焦点度1点) であるが、それが取り出し領域に転じた場合は、その wh 句の潜在的重量は主語よりも高い位置にあるので 0.5 点と設定される。つまり、文頭の wh 句は構造的

¹¹⁾ 一見すると、wh 句が基底の位置から単独で文頭に移動したように考えられるが、そのような移動は許されない。なぜなら、以下に示すように、左枝条件 (left branch condition) により、一般に名詞句内の左側の要素は左右どちらの移動に対しても拒絶反応を示すからである。

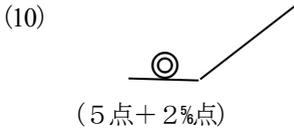
- (i) a. *I lost [_{NP} t_i of Bill][_{NP} an absolutely beautiful picture].
 b. *Sam repaired [_{NP} t_i on the north side][_{NP} the part of the roof].

(Wexler & Culicover, 1980:362)

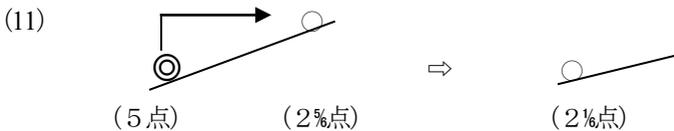
- (ii) a. Whose car $_j$ have you borrowed t_i ?
 b. *Whose $_j$ have you borrowed t_i car?

(Radford, 2009:201)

に見れば非常に軽い要素となり、その内部に生起する付加部の潜在的重量も $\frac{1}{3}$ 点と軽量になる。この関係節に焦点としての解釈を与えると、関係節の総重量は2%点（潜在的重量 $\frac{1}{3}$ 点+焦点度重量 1.5 点+有標の焦点度 1 点）とカウントされる¹²⁾。その結果、文頭の wh 句の総重量は7%点となり、以下のように文頭過多の傾斜が形成される。



ここで文頭の wh 句の内部から関係節を文末に移動させると、文頭の wh 句は5点、文末の関係節は2%点となる。文頭の wh 句の重量から文末の関係節の重量を差し引くと、最終的な wh 句の総重量は2%点となるため、以下の傾斜図が示すように、かろうじて左方傾斜は保つことがわかる。



文頭の wh 句からの外置化は過度の傾斜を避けるための「最後の手段」として駆動されると考えるのが自然であるが、(9a) の構造を文頭過多と捉えるか否か、そして外置化が適用された (8c) の構造が文頭重心の許容範囲に収まるか否かはまさに個人のバランス感覚の差に還元されるという結論である。

¹²⁾ 潜在的重量の比率は主要部（補部）：付加部＝3：2と計算すると、主要部が0.5点の場合、付加部は $\frac{1}{3}$ 点となる。この付加部に付与される焦点度重量は既に述べたように、主語の半分とカウントされるため1.5点となる。

5. ま と め

本稿では、(1) と (2) の対比を巡って、バランス理論の新モデルの枠組みで考察した。

- (1) a. *Who_j did John give t_i to t_j [_{NP} the picture that was hanging on the wall]_i ?
 b. *Who_j did John give t_i to Mary [_{NP} a picture of t_j]_i ?
- (2) a. [Which newspaper]_j did [_{NP} a review t_j] appear in t_i [_{PP} of that new book by Fred]_i ?
 b. [_{PP} To whom]_j did you tell t_j t_i yesterday [_{NP} the story about Mary]_i ?

(1) のような完全に非文と判断される事例は、wh 疑問文が満たすべき文頭重心の原則に対する重大な違反として処理されるが、マージナルとは言え、(2) のような容認可能な事例の文法性を保証するためには、焦点の総重量の違いが生み出す文の傾斜の違いという相対的な尺度を備えたシステムが不可欠であることを主張した。文法性、あるいは容認可能性に関しては個人差や段階性があり、自然言語の中には文法的な構造と非文法的な構造のあいだのグレイゾーンに属するような構造も存在する。このような境界的な文に対応するためには、文法の中に相対的な仕組みを仮定することで対処するのが妥当である。本稿では、wh 移動と右方焦点移動が一つの文内で適用された構造の文法性を通して、バランス理論がその微妙な文法性の予測に柔軟に対応できる潜在的可能性を秘めていることを主張した。

参考文献

- Chafe, W. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Culicover, P. and W. Wilkins (1984) *Locality in Linguistic Theory*. New York : Academic Press.
- Fiengo, R. (1981) *Surface Structure*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Fodor, J. D. (1978) "Parsing strategies and constraints on transformation," *Linguistic Inquiry* 9, 427-473.
- Freidin, R. (2012) *Syntax*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move-α*. Cambridge, MA : MIT Press.
- 中島平三 (1984) 『英語の移動現象研究』東京：研究社

- Nakajima, H. (1992) "Another type of antecedent government," *Linguistic Inquiry* 23, 313-328.
- Radford, A. (1988) *Transformational Grammar*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Radford, A. (2009) *Analysing English Sentences*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 杉山正二 (1999a) 「焦点移動の規則非両立現象について」『英語英米文学論集』8, 251-260.
- 杉山正二 (1999b) 「英語の焦点移動現象—バランス理論からの考察—」学位論文、安田女子大学
- 杉山正二 (2019) 「文末重心の原則と右方焦点移動 (Part 1) —重名詞句移動—」『英語英米文学論集』28, 21-41.
- 杉山正二 (2020) 「文末重心の原則と右方焦点移動 (Part 2) —名詞句からの外置化—」『英語英米文学論集』29, 55-75.
- 杉山正二 (2021) 「文頭重心の原則と wh 移動 —焦点度重量の相対化—」『英語英米文学論集』30, 31-49.
- 杉山正二 (2024) 「多重 wh 疑問文とバランス」『英語英米文学論集』33, 45-62.
- Wexler, K. and P. Culicover (1980) *Formal Principles of Language Acquisition*. Cambridge : MIT Press.
- Williams, E. (1981) "A readjustment in the learnability assumptions," in C. L. Baker and J. J. McCarthy (eds.) *The Logical Problems of Language Acquisition*. 64-78. Cambridge, MA : MIT Press.
- Winkler, S. (1997) *Focus and Secondary Predication*. Berlin : Mouton de Gruyter.

人間はどこまで動物なのか

青木克仁

Abstract

この論考では、人間の中の動物性の意味を考察する。西洋哲学の主流において、人間は人間以外の動物との比較における差異によって定義づけられ、その結果、人間はその本質において動物とは違うと結論付けられ、それゆえ動物と人間の間には非連続性があるとされてきた。他方、科学においては、ダーウィン進化論以降、動物と人間は進化の過程において、根本的に何らかの連続性があるというのが前提となっている。この論考では、これら諸説に対して、進化論の立場を前提にしつつも、非連続性を説明する「第三の立場」を採ることによって、人間の言語学習の謎を解き明かす。

序論

西洋哲学の主流において、人間は人間以外の動物（以後、単に「動物」と表記）との比較における差異によって定義づけられ、その結果、人間はその本質において動物とは違うと結論付けられ、それゆえ動物と人間の間には非連続性があるとされてきた。他方、科学においては、ダーウィン進化論以降、動物と人間は進化の過程において、根本的に何らかの連続性があるというのが、前提となっている。実際に、ダーウィン進化論は、神学的創造説における人間の地位を脅かすものとして登場したがゆえ、センセーショナルな出来事だった。

前者の「非連続性」の立場を採る場合、人間の本質として称揚されてきたものが「理性」であり、特に「言語を理性的に、即ち、論理的に、操る能力」が人間の本質を成す決定的な特質とされた。これによって、「人間」を思索することは、即ち「言語」能力について探求する道を歩むことといった通奏低音的な主題が課せられることとなった。しかしこの立場に立つと、「言語を論理的に操る」という点では、生成AIとの差異がほぼなくなりつつある今、人間性の特質としていつまで保持できるか

が怪しくなってきた。

後者の「連続性」の立場を採る場合、「非連続性」の立場を採る人々が称揚する人間の「言語能力」を「連続性」の立場から捉え直そうと、例えば、高等類人猿に言語習得が可能かといった問題に挑戦し、高等類人猿の中に言語の萌芽に当たるものを発見しようとしてきた。けれども、こうした挑戦において、むしろ人間と高等類人猿の間の溝が深まり、連続性の観点から「言語生成」を取り扱うことの困難が浮き彫りになってきている。

これらに対して、第三の立場が存在する。それは、進化の過程において、一種の「非連続性」を説明する立場であり、先駆的なヘルダー、その後ユクスキュルに端を発し、ゲーレンに代表されるドイツ「人間学（『哲学的人間学』と呼ばれている）」の系譜である。ヘルダーやユクスキュルを起点に、ボルグやポルトマン、シェーラー、ゲーレン、そして精神分析のジャック・ラカン、さらにその一部はハイデガーが受け継いだ伝統である。人間は「ネオテニー」の宿命を負うがゆえに、未熟なまま誕生し、神経系統も未発達の状態のまま幼児期を過ごすことになるという、謂わば「人間的自然」—自然から離れ行く自然なのだが—を前提にして人間の特異性を説明する立場である。言い換えれば、この「ネオテニー」という宿命に「非連続性」を説明する論拠を見る立場であり、「ネオテニー」ゆえに、人間の特質とされる「言語」が必要となり、「言語」による補完がなされることでようやく生存の可能性が高まったと考える立場なのだ。つまり、この「非連続性」こそが、「言語」による補佐を必要にし、「自然支配」という啓蒙的な理念に至る超越への道を開き、それゆえ人間は、生態系には居場所を持たぬ「超種（Super-species）」として君臨するようになる。ここから、「進化の頂点」という人間中心主義的な横柄な進化論の解釈が幅を利かせるようになり、自然は単に「道具的価値」を付与される対象にまで貶められることになった。そしてこの「言語」による活動が、通常の「進化」の道筋に加えて、「進歩」の圧力を加え、それがグローバル化した現在、大戦後の「大加速」と呼ばれる時代とその帰結としての「気候危機」をはじめとする「環境危機」の時代を迎えているのだ。地球に地質学的な力に匹敵する巨大な圧力を加えている「進歩」は、確かに、何か「進化」の道筋にはあり得ないような—例えば、温暖化による急激な

変化には「進化」の速度は追いつかない—「進化」の文脈とも言える生物圏そのものの破壊にまで向かっている。かくて「ネオテニー」という人間的宿命は、生物圏の命運をも左右するような、或る意味で、「進化」の道筋を脱線してしまった生物がもたらす、地球史的な出来事を帰結したと言えるかもしれない。

私達はこの論考において、進化論的説明が主流となり、進化の連続性という文脈の中で何らかの説明原理を見出さねばならないという常識があるにもかかわらず、人間という動物には、一概には「動物」と捉え切れない何かがあるという形で回帰してくる問題に向き合ってみようとする。比較認知学によれば、ヒトとチンパンジーは約400万年前に分化し、DNAの一致度も98.7%とまで言われているにもかかわらず、チンパンジーには「言語」の習得が困難だった理由を、進化の文脈の中では未だ十分に説明できていない。それゆえ、この論考では、人間の中の動物性の意味を考察してみようとする。そうした上で、「第三の立場」を採ることによって、人間の言語学習の謎が解けるのかという問いを考察する。

第一節 動物性との断絶、連続性の道の再検討

ジャック・ラカンの「ローマ講演」の中で、人間が「人間である」と断言するまでの強迫的なプロセスを三段階で記しているが、その最初の段階は、「人間は人間でないものを知っている」という命題だ。西洋哲学の歴史を紐解けば、「人間の名」に値するための本質を確定しようと試みる様々な議論が展開されてきたことが分かる。その最初期の試みとして、アリストテレスによれば、ζῷον λόγον ἔχον（そのラテン語訳、Animal rationale）は人間の定義として「ロゴスを具えた動物」、そしてラテン語訳からよく知られるようになった「理性的動物」、を導き出しているが、この有名な定義も、「人間でないもの」として先ず「動物」を引き合いに出し、その「動物」との決定的差異を「ロゴス」に求めるという形で定義がなされている。「人間」は「動物」と対照的に定義されることで境界設定されるようになるのだが、その他方で「動物」概念は、逆に様々な生命体が「動物」という一語に分類され、あたかも「動物性」という本質を共有している集団であるかのように一纏めに括られ、個々の存在

者の多様性が貧困化し、複雑性、多様性は捨象されてしまう。哲学史においても、人類史においても、動物種の差異が消去されると同時並行に、動物の生が軽んじられ、動物に向けて、概念のレベルにおける象徴次元における暴力どころか、概念レベルで「物格」に貶められていくように、物理的次元においても殺戮や酷使に至る夥しい暴力があたかも正当であるかのように行われ続けてきた。

動物はかくて「人間でないもの」の典型事例という扱いを受け、それとの対比によって打ち立てられた人間主義は、その正当化のために、「人間のみが言語を有する」という根拠を持ち出す。ところが、私達は、人間のみが、言語を話す理性的存在である、というこの一事を確定できずに来ている。

『ヒューマニズムについて』の中で、ハイデガーは、「理性的動物」という定義を批判して「人間を動物と同じように見ず動物に種差をつけ加える場合でも、人間はそれによってつまるところは、動物の本質領域へと追いやられていることも、はっきりと知っておかねばなりません」(28~29)と述べている。言い換えれば、「理性的動物」という定義は、人間を先ず「動物性」の中に位置づけた上で見出される種差を「人間性」の指標にしているに過ぎず、その種差自体が動物性の内部に見出される特定の性質であるに過ぎないということに注意を向けているのだ。私達は、ハイデガー哲学の解説に向かうわけではないが、このハイデガーの言葉には重要な意味があると思われる。それは、「ロゴスを具える」ということが、動物性の連続体の中における種差の問題なのか、それとも動物性とは決定的に断絶する特性なのか、といったことには、これだけでは決着をつけることはできないということだ。とりわけ、進化論が主流になっている現在、「言葉を持つ」に至る経緯を進化の中で位置づけるという動物との連続性を見る見方が、動物を「人間ではないもの」として排除する非連続性の見方よりも優勢になっているため、連続性の文脈の中で「言語」を捉え直す作業が行われている。こうした主流となっている作業を非反省的に肯定してしまう前に、私達は、「動物」という概念を見直しておくことにしよう。

第二節 ユクスキュルの「環世界」

私達は、「世界」を一つの巨大な「容器」として捉え、ありとあらゆる事物と並ん

で人間を含めたありとあらゆる生物がこの「容器」に投げ込まれてあり、この巨大な全体としての世界を生きていると考えがちである。哲学的な伝統においても、アリストテレスによって示され、キリスト教世界において定着した人間を頂点に置く、ヒエラルキー的に生物種を配列するような単一の世界が想定されてきた。これを他のイメージを使って言い換えるのならば、単一で等質の「時空」という共通の舞台上で、様々な生物種が生存しているということになるだろう。

生物学者のユクスキュルは、こうした世界観に異を唱えた。ユクスキュルに従えば、生物はその種固有の「環世界」の中で生きており、それは生物種の数だけ存在するような、人間の眼からしたら、無限の多様性を持った、容易に擬人化ができないような世界なのである。ユクスキュルの「環世界」論は、人間中心主義的な自然観に対する根本的な変換を迫るような理論として登場した。

世界という一元的で単一の巨大な「容器」の中にあらゆる生物種が序列づけられて存在するという見方が支配的であり、その支配力は、ダーウィン進化論をも、人間中心主義的解釈、即ち、人間こそが進化の頂点という見方、によって歪めてしまっている。全ての生物種がその中を生きる等質な時空というものは、むしろ抽象化の座である人間的意識の産物であって、ユクスキュルは、そうした等質な時空を前提にできない、その生物種の数だけある多様な存在様式に初めて目を向けた。

ユクスキュル以前は、人間が前提にしている等質な時空を様々な生物が共有して生きていると考えられていたが、むしろ同一の等質空間の共有という観察の仕方自体が幻想だったのだ。人間が他の生物種に対して優越しているという証拠として持ち出す等質の客観的なデカルト空間によって規定される環境から見るとすれば、生物種に備わる受容器官の特性によって選別される特定の「知覚刺激」から成る閉じた統一体こそが生物の「環世界」なのである。従って、既にカントが定式化していたように、人間は「物自体」と関わることはできないのだが、これは何れも人間に限ったことではないということになる。

『生物から見た世界』のマダニに関する有名な記述に従えば、視覚も聴覚も存在しないマダニは、嗅覚だけを頼りに、「すべての哺乳類の皮脂腺から発散される酪酸

の臭い」を「信号」として、「獲物に向かって運まかせに落下」してくる。

記号学的に表現するのなら、生物種は「知覚器官」に選択的に入力された特定の「知覚刺激」を「信号 (signal)」として受け止め、「作用器官」を通して、その生物種固有の行動を出力する。記号学的には、知覚刺激という記号とそれに対する行動が一義的であるように行動を決定する。マダニの例で説明するのなら、「酪酸」という知覚刺激に対して一律に「落下」という行動を出力するのである。

ユクスキュルが研究室で行った実験によれば、マダニは味覚を欠いているゆえ、血の味を好むゆえに、行動を起こすわけではない。摂氏 37 度に調整しておけば、マダニはどんな液体でも吸引するのだという。図式化して記すならば、「酪酸→落下」、「37°C→吸血」といった「信号」による一義的な行動様式を示すだけなのである。

エド・ヨンは、『動物には何が見え、聞こえ、感じられるのか：人間には感知できない驚異の環世界』の中で、ユクスキュルによる「家の窓」の喩えを引用し、ユクスキュルの提起した「環世界」という考え方を、イメージ喚起的に説明している。「それぞれの家には、たくさんの窓があり、いずれも庭に面している。光の窓、音の窓、匂いの窓、味の窓、そして膨大な数の感触の窓。これらの窓がどこにどのように造られているかによって、庭の風景は違って見えるはずだ。窓の外に広がる大きな世界から切り取られた断片として見えているのではない。窓を通して見える部分だけが、その家特有の世界であり、その家に属しているといってもいい。それが、その家の〈環世界〉だ」(11)。カッシーラーは『言語』の中でやはりユクスキュルの「環世界」を扱っているが、彼の表現を借りると、「各生物はいわばモノダ的存在」(62) なのだ。他のモノダから影響を受けないという意味で、ライプニッツは「モノダは窓を持たない」と表現したのだが、「環世界」を具える生物は、確かに他の生物種の「環世界」とは交流をほぼ持たないが、「環世界」そのものは「家の窓」に喩えられているように、その生物特有の世界を与えているのである。先ほどのマダニのケースでは、「酪酸」の匂いという知覚刺激に開かれている窓が、マダニが外界の刺激を受け取る感受系なのであって、それがマダニの行動様式を決定するのである。

「環世界」を具えている生物が、外界の刺激を受け入れる感受系およびそれらに反応し行動を出力する反応系は、すべての場合に密接に絡み合っている。両者はユ

クスキュルにより、動物の「機能的円環 (Funktionskreis)」として記述されている同一連鎖をなしている。本能の導きによって、あらゆる行動は何らかの知覚刺激に由来し、あらゆる知覚も何らかの行動に帰結するという、ユクスキュルの言う「機能的円環」、あるいは、ヴァイツゼッカーの用語を使うのなら「ゲシュタルトクライス」が、有機体と環境を調和させてくれている。だが、こうした調和的なヴィジョンを拡張して、人間の行動を説明するとなると話は違ってくるだろう。

第三節 「環世界論」は人間存在を説明するのにどこまで拡張可能か

『生命の劇場』の中で、ユクスキュルは、プラトンの洞窟の比喻を使って、人間自身も自分の「環世界」に繋ぎ止められていることを論じている。周知の通り、プラトンは、『国家』の第7巻で語られている例え話が有名な「洞窟の比喻」である。それによると、人間は暗い洞窟の中で壁面に向き合う形で束縛されており、壁面に投げられる影絵芝居を現実だと思い込んでしまっているのだが、それと同じように、人間の日常生活の中には、様々な臆見 (ドクサ) に毒されており、私達の認識に制約を与えている。人間も限られた範囲の知覚刺激にしか対応できないという点では、「家の窓」による制約が存在していることは確かで、こうした意味合いにおいて人間も「環世界」に制約されていることは事実だろう。例えば、人間が知覚できる光の波長は限られており、それが私達の色彩世界を形成している。けれども、人間の場合、限られた知覚刺激を「信号」として受け止め、それを一義的な行動として出力させているかという点、それには疑義を呈する余地があると言わざるを得ない。

マックス・シェラーが、そこに自由を読み取ったように、人間は、本能によっては規定され切れない存在であり、生まれつき決まってしまう「環世界」に鎖されて生きる「世界閉鎖的」な存在ではなく、体験加工の恣意性という「世界開放的」な存在なのである。実際に、「機能的円環」あるいは「ゲシュタルトクライス」が、有機体と環境を調和させてくれる調和的なヴィジョンの下、生物を捉えているのだが、こうした調和的なヴィジョンは、動物の水準までの話で、哲学的人間学は、「環世界」論に見受けられる調和が破綻するところに、人間を位置づけるのである。

生命体が、「機能的円環」あるいは「ゲシュタルトクライス」の中で、環境に有機的に接岸することは、人間の場合、あり得ないということが、哲学的人間学の出発点なのである。哲学的人間学の系譜に位置づけられる思想家達は、人間の場合、自然環境との有機的な調和からの決定的なずれを、言語によって補おうとするがため、それがどうしても過剰な埋め合わせになってしまうところに、人間の諸々の悲喜劇が存在すると見ている。

「哲学的人間学」の先駆的存在であるヘルダーが著した『言語起源論』を読むことによって、私達はヘルダー自身の言葉を借りて言うならば、「人間が本能の力と確かさにおいて他の動物よりもかなり劣っている」のではないのかといった疑念を引き起こされる。ヘルダーによって引き起こされた疑念との関連で思い出すのが、エピメテウスの神話だ。この神話は、プラトンが『プロタゴラス』の中で紹介しているのだが、プロタゴラスはソクラテスに向かって、プロメテウスとエピメテウスの神話を語って聞かせるという設定になっている。それはこんな話である。神々はプロメテウスとエピメテウスに、様々な生物種のそれぞれに相応しい装備や能力を分配するよう命じ、エピメテウスが分配の仕事を請け負い、プロメテウスはそれを点検するということにした。分配をするに際して、エピメテウスは決していかなる種も、滅びて消え去ることがないように工夫した。例えば、お互い同士が滅ぼし合うことを避けるための手段を与え、季節にも順応できるようにした。さらに、身を養う糧として、それぞれの種にそれぞれ異なった食物を用意した。肉を食することを許された種に対しては、少しの子どもしか産むことを許さず、他方、これらの餌食となり減っていく種には多産の能力を賦与し、種族保存の途を図るなど工夫を施したのである。かくてエピメテウスは様々な生物種に気前よく、「技術的な本能」を与え過ぎてしまい、人間の種は、裸のまま何の装備も能力もないまま残されてしまった。これを見たプロメテウスは人間のためにどのような保全の手段を見出してやったものか困り果て、ヘパイストスとアテナのところから、技術的な知恵を火とともに盗み出し人間に与えた。かくて、人間は、技術によって、音声に区切りをつけているいろいろな言葉をつくったし、家や着物や履物や寝具をつくり、そして大地から生じる食物などを発見した。

この神話は、人間の不全感を見事に描き出している。人間以外の生物種には、アプリアに具わった能力があり、それが生存の型を与えているが、人間の場合は、後付けの技術や火（エネルギー）で、自分に欠けたものを補う必要があった。これは、動物と比較した場合の人間における不備や欠陥を教えてくれる神話だが、ヘルダーもこうした不備や欠陥を指摘しているのだ。厳しい気候を凌ぐための保護するための、敵に対する防御のための、あるいは攻撃のための器官、知覚能力が脆弱であること等、ニーチェ風に言えば「欠陥動物」と呼ばざるを得ないような貧弱な生物こそが人間の姿である。ヘルダーは、如何なる動物も誕生の時から定められた環境を持ち、直ぐにその中に入り、そこで生きそこで死ぬ。だが特徴的なのは、動物の本能が強くて確かなほど、その環境はより狭く、その生産活動はより限定的なことである。これは後に、ユクスキュルによって「環世界」と名付けられる、生物種に特有な画一的な生存圏なのである。

プロメテウスの贈り物である「火」が象徴するものとは、後天的に習得した技術を駆使し、この世界を能動的かつ計画的に変形し、可能な限り「想定内」に収めていく作用を生存のために活用しなければ、人間は生存できないということである。言い換えれば、言葉によって、後付的に習得しなければならぬ技術に代表される習得プログラムによって補わねばおよそ生存することすら適わない脆弱な生き物、それが人間だということなのだ。人間は「欠如や不備のある存在」である。それなくしては生命自体を危険に晒すような根源的な本能、—生存のための生得的技術を与えてくれ、適時に発動し正確無比の行動様式を出力してくれる本能—が、一世を風靡した精神分析家の岸田秀の言葉を借りれば、「壊れている」のである。

第四節 「第三の道」から帰結する仮説

「哲学的人間学」の伝統が示していることは、人間が進化の道筋を逸れ、自然とは違和がある文化を築いたのは、逆説的にも人間が或る根源的な不備あるいは欠如を抱えているからなのであって、エピメテウス神話が象徴的に描いているように、人間が言葉と技術を受け取ったのは、人間の根源にある「欠如」の所為なのだ。この

根源的欠如は、ボルグの「胎児化説」やポルトマンの「生理的早産説」が教えてくれている通り、大脳新皮質が付け加わり、大脳が異様に大きくなり過ぎた人間の胎児は、未熟なまま産まれなければ、産道通過が適わなくなってしまうため、誰もが例外なく未熟なまま生まれ、「ネオテニー（幼形成熟）」の宿命を担うということなのだ。

前回までの論考において、言語習得の条件を示す仮説を提起した。もう一度おさらいしておこう。ニコラス・ハンフリーは、『喪失と獲得』の中で、3万年前、旧石器時代を生きた人類が描いた「洞窟絵画」は、フォトグラフィックな描写力で特筆されるべきものだが、こうしたフォトグラフィックな「正確な描写力」を持った絵画を、自閉症を患う少女、ナディアが描いていることを類比的に捉えようと試みた。自閉症の少女は、言語を獲得する努力が実るとほぼ同時にフォトグラフィックなまでの描写力を失ってしまうのである。ハンフリーに言わせれば、約1万2千年前の氷期の終わりを境に、人類は「洞窟絵画」に見られた精巧な描写力を喪失してしまった。ここからハンフリーは仮説を打ち立てる。フォトグラフィック・メモリーの喪失が、言語に代表される抽象化の能力をもたらしたのではないかと。従って、自閉症の少女ナディアや「洞窟絵画」全盛の時代の人類、あるいは、「フォトグラフィック・メモリー」を有するチンパンジーやボノボなどの高等類人猿には、言語習得が困難となる、という仮説だ。

このハンフリーの仮説に倣って、前回の論考において、私自身も仮説を立ててみた。それは、人間の脳が巨大化するにつれ、「ネオテニー」の宿命が如実なものとなり、神経系が未熟な人間の子どもは、「中間カテゴリー」のような大雑把な認識形態を学習し易くなったというものだ。言い換えれば、「ネオテニー」の宿命ゆえ、神経系の未成熟という欠如を被った人間の幼児は、抽象化能力を研ぎ澄ますまでもなく、既に脆弱な認識能力しか持ち合わせていないがため、あたかも「抽象」されたかのような曖昧な認識しか叶わず、むしろその脆弱さこそが「言語習得」の鍵となっているという仮説である。

ハンフリーは「抽象化」と言っているが、様々な具体的個別の事例に向き合って抽象化を進めるというのではなく、初めから曖昧な「中間カテゴリー」に相応しい

ような表象能力しか備わっていないという点が重要なのだ。自閉症の少女ナディアが描いた、細部まで鮮明で写実的な描写力を反映している絵画と比較すれば、人間の幼児の描く絵画は大変稚拙であり、かろうじて事物の典型的特徴を、その絵画の中に留めているのである。つまり、正確無比の個別の木ではなく、何となく「木らしい」特徴を有している木、なのである。少女ナディアのような「フォトグラフィック・メモリー」を有していると、それが却って邪魔だてし、「木らしい」イメージを表象することが困難となってしまうだろう。言い換えれば、幼児は、具体的な個々の「木々」に出会って、それらを総合的に抽象化していった結果として「木」という概念を形成したのではないということだ。典型的な「木らしい」特徴を備えた「木」に相応しい曖昧な概念しか表象し得ない子どもの認知能力は、個別を総合的に抽象していくような高度な能力からは程遠い貧弱なものであるのだが、むしろその貧弱さがあっても構わなかった。なぜならば、この貧弱な表象化能力に相応しい「中間カテゴリー」の存在は、まさに「子どもフレンドリー」なのだから。

人間の子どもは、認知意味論が明らかにしたように、「上位のカテゴリー」でも「下位のカテゴリー」でもない「中間カテゴリー」に定位して、言語学習を進めていくのだが、まさにこの「中間カテゴリー」の取得をするためには、却って「フォトグラフィック・メモリー」は障害となるのだ。それゆえ、私の仮説は、更にこの事実から一步進んで、「中間カテゴリー」を有する言語体系は「子どもフレンドリー」であるゆえ、後の時代まで淘汰されずに生き延びてきたというものなのだ。

最後に、この仮説の有効性を、高等類人猿の言語学習の実例を通して、証明しておこう。アメリカの霊長類学者、心理学者のスー・サヴェジ＝ランボーは、ボノボの言語習得能力を研究した。彼女の研究を有名にしたのは、「天才猿」と呼ばれた「カンジ」の言語学習である。彼女は、ボノボに文法を学習させる訓練を積み重ねていく中、「カンジ」と名付けられたボノボは、「石鹸をリングの上に置きなさい」のような、ボノボの日常的な生活においては、およそ非実用的な文法課題を課せられた場合でも、90%の正答率を示すほど、正しく反応できるようになっていった。しかも驚くべきことに、カンジに特別な訓練を施していたわけではないのに、他の大人

のボノボ達よりも容易に文法課題に取り組むことができたのである。

何がカンジを「例外的に」と形容してよいほど特別なものにしたのだろうか。カンジには「マタタ」と名付けられていた養母のボノボがおり、カンジは、マタタが言語学習をしているのを彼女の周りで遊びながら見ていたのである。そうこうしている内に、まさしく「自然に」実験者達がマタタに期待しているゲームが何を意図しているのかを読み取っていった。

ここには「実験者の偏見」と呼ぶべき、大いなる勘違いが存在していたのだ。つまり、大人にできないことが小さい子どもにできるはずがないという偏見である。成熟したチンパンジーやボノボでさえ、文法課題に関して言えば、難を抱えてしまうのに、ましてや未成熟な子どもを訓練しても成果があがるはずがないという思い込みが存在していたのである。カンジの実例は、実験者をこうした思い込みから解放してくれるだろう。

言語学者のテレンス・ディーコンは、言語獲得の「臨界期効果」という観点から、このスー・サヴェジ＝ランボウの実験を振り返っている。人間の子どもは特にそうだが、事細かく細部に渡って記憶することが困難であるが、子どものこうした特性が言語臨界期においては却って長所となる。人間の子どもよりも「フォトグラフィック・メモリー」を有するとされるボノボやチンパンジーの場合、こうした正確無比な記憶力がそこまで発達していない時期は至って短いだろう。言い換えれば、ボノボやチンパンジーの「言語臨界期」は大変短いということだ。幸いなことに、カンジは、記憶力が未発達な、このごく初期の段階でマタタに纏わりついていたことで、言語訓練に接することができたのである。

カンジの例からも窺い知ることができるように、或る種の未熟さが、人間の言語習得には、概念学習のために必要であると言えるのだ。このボノボの言語訓練の実例も、私達の仮説の正しさを証明してくれることだろう。

結 論

ニーチェは「記憶力がよすぎる人は思想家になれない」という断片を残しているそうだが、まさに「フォトグラフィック・メモリー」を有するボノボやチンパンジ

一は思想家にはなれなかったわけだ。そして恐らく、精密な「洞窟絵画」を残していたご先祖様達も。

目の前の食料や敵の存在を巡って生活が営まれ、まさに「今・ここ」を生きるボノボやチンパンジーにとって「フォトグラフィック・メモリー」を持つことは生存のために有利に働くことだろう。しかし「今・ここ」という投錨点に記憶が強固に結びついてしまうのなら、「表象」を自由に想像力によって遊ばせることもできなくなるだろう。ここに人間だけに、表象イメージに基づく想像力の遊びが可能になる根拠がある。「中間カテゴリー」を介した緩い繋がりで見実と接続している人間は、想像力による表象の戯れを「妄想」や「幻想」という形で駆使し得る。

私達が詳細に論じてきたように、人間が或る根源的不備あるいは欠如を抱えているからこそ、言葉と技術で補わねば、生存すら適わなかったのだ。人間の根源にある「欠如」の秘密は、人間の生誕時に担う宿命にある。人間は「ネオテニー」を宿命として生誕し、未発達な神経系ゆえの認知機能の未熟さという生物としての生存という点では致命的な欠陥状態で子ども時代を過ごさねばならない。子どもの描く稚拙な絵画に端的に表現されているように、認知機能の未熟さという欠陥がありながらも、なおも「子どもフレンドリー」な言語において「中間カテゴリー」の学習がその未熟さゆえに却って促進されるのである。認知機能の未熟さに対応した「子どもフレンドリー」な言語システムゆえ、言語習得が容易になる。未熟な認知機能に起因する表象イメージは、かくて言語機能と連動し、言語学習のための基盤にさえなっていく。同時に、言語システムからは、独立した表象イメージの操作が可能となり、想像力の遊びという武器を人間は手にすることになるのだ。

ユクスキュルによれば、動物の場合、「知覚刺激」から成る「環世界」が生存の型を規定している。けれども、人間は、「ネオテニー」の宿命ゆえ本能が壊れた動物と化した。このままでは人間の「環境」は未規定のまま、簡単に言えば、「訳の分からない混沌たるごちゃごちゃ」として、あるいはラカン的に言えば「欲動のアンサーキー」として、出現することになる。このことは、環境からの「刺激」をどうしていか分からないということの意味するので、当然ながら、生存の危機に晒されてし

まうことになる。従って、人間の場合、まさに生き残るためにも、「言語」で「環境」の未規定性を補う必要が出てくるのだ。言い換えれば、人間は「言語（象徴）」で環境世界に「名前」を与え、概念化することで、「環境」を規定することで、「壊れた本能」の代理物を形成する必要があるということだ。

人間の子どもは、親をはじめとする周囲の大人達が行う「命名」の儀式に立ち会い、「言語」を受容しなければ、未規定な環境世界に晒され、寄る辺なき存在である人間の子どもは生存することすらできなくなる。私達の身の回りのモノで「名前」がつけられていない事物は存在しない。そのようなものがもしあるとしたら、私達はそれに恐怖や不安を抱くことになるだろうし、トラウマをももたらしかねないだろう。「命名」は、この世の中に、名付けられたものを出現させるがゆえに、「魔術的思考」なのである。例えば、7歳のヘレン・ケラーの場合を考えてみよう。盲目の聾啞者であったヘレンがサリヴァン先生の導きによって、言語の意味と機能を了解した日の出来事が記録されている。カッシーラーの『言語』の第3章に、その日の様子を記したサリヴァン先生の手記が引用されている。冷たい水がどっと流れ出てコップにいっぱいになった時、私はヘレンの何も持っていない方の手に **W-a-t-e-r** と綴ってやりました。手にかかる冷たい水の感じと密接に結びついたこの言葉は、彼女を驚かせたようでした。彼女はコップを落とし、釘づけにされたように立っていました。彼女の顔には新しい光明が浮かんできました。彼女は数回 **Water** と綴りました。...そして急に振り返って、私の名前を聞くのでした。」「彼女は、どんな物も名前をもっていること、そして、手のアルファベットが彼女の知りたいと思っている全てのことの鍵であるということ学びました。」水に関する個別の体験がどれもみな「同じ水」を指す「シンボル」であることをヘレンが理解した瞬間である。

「全ての対象に名前がある」というのが、「環世界」に規定されず、「シンボル体系」に頼って生を営む人間が、言語学習時に得る洞察なのである。人間は、物理的な「現実界」と文明・文化という名の下、創造された「フィクション」の世界の両方を生きており、本来は、二つの世界が直接的に交流することはない。魔術的思考とは、この二つの世界が直接交流するものと捉える思考であり、「アバダケダブラ」と唱えれば相手が息絶えると考えてしまう一種原始的な思考なのである。つまり、言語的

意味が物理的現象を直接引き起こすとする思考法なのである。「命名」という言語行為は、子どもにとってそれが初めて体験される時、限りなくこうした「魔術的思考」に近いものがあることだろう。カッシーラーは、「ヘレン・ケラーの例が示す如く、人間は、そのシンボルの世界を、極めて貧弱でわずかな材料からも構成することができる」(84)としている。そして続けて、「もし子どもが言語の意味を把握するのに成功したならば、いかなる特殊的感觉素材で、この意味を把握し得るか、ということとは重大なことではない」(84)と述べる。ヘレン・ケラーの例を取り上げて、カッシーラーが述べていることで、興味深い点は、「もし感覺主義の学説が正しいとするならば、もしすべての観念が、もとの感覺印象のかすかな模写にすぎないとするならば、盲で、聾で、啞の子どもの条件は、実に絶望的なものであろう。なぜならば、その子どもは、まさに、人間的知識の源泉を奪われているからである」(83)という点である。「フォトグラフィック・メモリー」が捉え得る強烈な感覺印象から出発しなければ、言語習得が適わないのであるのならば、ヘレン・ケラーのような事例は、あり得ないこととなってしまう。かくて、このヘレン・ケラーの事例も、本能の壊れた動物たる人間は、未規定な状態の「環境」が言語によって命名される際に、子どもの神経系の未熟さという条件の下でも、言語習得が可能になるよう、「中間カテゴリー」が用意されており、「中間カテゴリー」のように、まさに、子どもにとって言語習得の窓口となってくれるような「子どもフレンドリー」な誘いがあるお陰で、子どもが言語世界に入っていけるのだということを教えてくれる。

最後に、「クオリア」という謎について触れておこう。「今、ここ」への投錨を可能にする「フォトグラフィック・メモリー」を欠いた人間の場合、もし「クオリア」という感覺質をも持たないとしたら、「今、ここ」から完全に遊離した存在になってしまうことだろう。つまり、「クオリア」さえ欠けてしまうと人間は「離人症」的存在に墮してしまいうだろうということだ。「クオリア」は「私は生きている」という強烈な質感を与えるゆえに、言語においても、イメージにおいても、象徴化に向かう傾向を持つ人間が、現実に根を下ろすための、AIなどとは異なる生命としての資質なのではないだろうか。

もう一つの結論

「ネオテニー」の宿命ゆえに、未熟なまま生誕する人間は、未熟な神経系に即した言語学習をするがゆえに、先ず、「中間カテゴリー」から「言語」に入門するということを見てきた。なぜならば「中間カテゴリー」の習得こそが「子どもフレンドリー」だからだ。「フォトグラフィック・メモリー」から程遠い曖昧な表象しか形成できない人間の子どもにとって「中間カテゴリー」の存在は「渡りに船」である。「フォトグラフィック・メモリー」を有するボノボやチンパンジーに「中間カテゴリー」を学習させることは、訳のわからないものを押し付けるようなものだから、当然、高等類人猿達は、人間の言語を学習することに困難を覚えることだろうし、動物学者の手による数多の実験がそのことを実証している。幼児が描く絵画が象徴的に物語っているように、人間の子どもの表象能力は劣っているわけだが、にもかかわらず、この段階から言語を習得できないと生死にかかわるゆえ、言語学習を円滑に進めなければならない。そんな矢先に、「中間カテゴリー」から入門できるということは、未熟な認知能力に対して、いきなり高い敷居を用意するわけではないので、大変「子ども・フレンドリー」であると言えるだろう。

ここで注意しなければならないことは、「中間カテゴリー」のような、或る意味、大変曖昧なカテゴリーから言語に入門していくという子どもの未熟な認知能力である。フォトグラフィック・メモリーを有しているのなら、むしろ「下位カテゴリー」の方が、様々な特殊形態を示すがゆえに、言語への入門に相応しいことになるだろう。ただし、そうだとしても、今度は一旦習得した「下位カテゴリー」を「中間カテゴリー」へと抽象する過程において、高等類人猿は、そのフォトグラフィック・メモリーゆえに躓きを覚えることだろう。このように考えると、人間の幼児の未熟な認知能力こそが、人間の有する既成の言語形態へ入門するための前提条件だと言えるだろう。

未熟な認知能力ゆえに、松の木も桜の木も杉の木云々も全て同じ「木」という「中間カテゴリー」に属するという荒業を成し遂げられるのだとして、フォトグラフィック・メモリーとは程遠いピンボケの認知能力の持ち主にとって、現在を、つまり、「今ここ」を生きるということが如何にして可能になるのだろうか。過去も現在も

未来もピンボケの知覚によって捉えられるとしたら、現在をとりわけ差異化することができないだろうことが、容易に想像できるからだ。こうした状態を生きていく上で、必要となるのがクオリアということになるのだろう。

意識経験は、様々な現れを持つ。視覚経験には色彩や形態、聴覚経験には音色やリズムといった具合にそれぞれに特有の現れがある。経験主体の内に現れるものとしての意識は「現象的意識」と呼ばれる。意識の「現象的性格」とは、このような現れを伴うあり方を指す。現れは、質感を典型とするゆえ、そうした質的性質を「クオリア」と呼んでいる。「クオリア」とは、外界に対する実感、自分の身体に対する実感、自分の精神状態、特に喜怒哀楽などの感情に伴う実感に関連し、一言で言えば、生の実感のことなのである。離人症の患者はこうした実感を失うとされている。従って、言い換えると、クオリアは、個人的な体験に対して実感を付与すると言えるだろう。

以前発表した論考において、私達が見てきたように、私達の生物的身体は、性欲動の発現によって「エロース的身体」化してしまっており、五感に至るまで性欲動発現の場に様変わりしてしまっている。

アリストテレスは、「あらゆる人間はその本性として知ろうと欲する。このことを指示するものは、われわれが感覚において味わう喜びである。なぜならば、その有用性を離れても感覚はそれ自身のために愛されている」と述べる。動物の本能は、進化の道筋の中で「有用性」から離れることは死を意味するがゆえに、「有用性」を離れるということは決してあり得ないだろう。しかし、人間だけが、進化の中で発達したはずの感覚における有用性を離れて、アリストテレスが指摘しているように、感覚することそれ自身に喜びを見出すことができるようになってしまっている。ゆえに、美術や音楽を発展させてきたのである。

人間存在を語る上で「感覚において味わう喜び」が、とりわけ「有用性」を離れてもそれ自身のために愛されているものとして語られる意味を深く考察すべきである。人間は、確かに感覚からやってくる質感（クオリア）を経験し、生の充実感を覚え、幸福な時間を過ごしている。

ネオテニーの宿命を抱えて生まれてくる人間にとって、外界は「欲動のアナーキー」状態で混沌としたものとして体験される。人間の場合、性欲動が適切な時期が来てから発動するのではなく、幼児期から作動しているわけだが、性欲動は自己保存欲動に依託する形で現れ、人間は五感に至るまで、性欲動の発現の場となる。ネオテニーの宿命ゆえ、生物学的身体を規定すべく働くはずの「環世界」という環境との有機的繋がりを欠いた人間は、現実との関係を性欲動に乗っ取られた五感による快/不快の属性判断を介して決定していく。

私が打ち立てたい仮説は、性欲動が何に固着するのか、クオリアがエピソード記憶の何に彩を添えるのか、この二つはほぼ同型であるということだ。前野隆司が述べているように、クオリアは、想い出、エピソード記憶、を鮮明な記憶として、印象付けに寄与しており、記憶の索引をつけてくれている(129)。これは「欲動」の固着に関連しているのではないか。生き活きとした情動を伴う体験は、エピソード記憶に鮮やかな彩を添え、その後も自分の体験の型として自分自身の性格や個性を決めることになる。

ネオテニーの宿命を担う人間の認知能力の未熟さが、人間を「他者の言語」を習得しなければ生きていけない存在にしてしまい、それと同時に人間の身体を「エロース的身体」に変貌させてしまう。「フォトグラフィック・メモリー」を有していれば、「中間カテゴリー」から言語に入門するということはある得なかったのに、人間は、ネオテニーに起因するその未熟な認知能力ゆえに「中間カテゴリー」の曖昧さが却って「子ども・フレンドリー」な言語への入門コースを開いてくれる。ただその曖昧さの中で、「今、ここ」に色付けを与え、生き活きとした印象付けに寄与してくれるのが、「性欲動」であり、その結果としての「クオリア」なのである。

引用および参考文献 (引用頁は本論中の括弧内に記す)

アリストテレス、『形而上学』上，出隆訳，岩波書店，1959.

カッシーラー、『人間』，宮城音弥訳，岩波文庫，1997.

ゲーレン，A.，『人間』，平野具男訳，法政大学出版局，1985.

ジョンソン，マーク，『心のなかの身体』，菅野盾樹訳，紀伊国屋書店，1991.

- スー・サヴェジ＝ランボー、『人と話すサル「カンジ」』、石館康平訳、講談社、1997.
- シェーラー、マックス、『宇宙における人間の地位』、山本達他訳 in 『シェーラー著作集13』、飯島宗享他編、白水社、2002.
- ソシュール、『一般言語学講義』、小林英夫訳、岩波書店、1940.
- ディーコン、『ヒトはいかにして人となったか』、金子隆芳訳、新曜社、1999.
- ハイデガー、『ヒューマニズムについて』、佐々木一義訳、理想社、1974.
- ハンフリー、ニコラス、『喪失と獲得』、垂水雄二訳、紀伊国屋書店、2004.
- プラトン、『プロタゴラス』、藤沢令夫訳、岩波文庫、1988.
- ヘルダー、『言語起源論』、宮谷尚実訳、講談社学術文庫、2017.
- ポルトマン、アドルフ、『人間はどこまで動物か』、高木正孝訳、岩波書店、1961.
- 前野隆司、『脳はなぜ「心」を作ったのか』、筑摩書房、2004.
- ユクスキュル、『生物から見た世界』、日高敏隆他訳、岩波文庫、2005.
- ユクスキュル、『生命の劇場』、入江重吉他訳、講談社学術文庫、2012.
- リーキー、リチャード、『ヒトはいつから人間になったか』、馬場悠男訳、草思社、1996.
- ルーウィン、『現生人類の起源』、渡辺毅訳、東京化学同人、1999.
- レイコフ、G., ジョンソン、M., 『肉中の哲学』、計見一雄訳、哲学書房、2004.

「虚構世界」と「現実世界」：
 小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (19)
 —— 女性と共感・Bridget Jones との 30 年 ——

青木 順子

Abstract

1996 年発刊, *Bridget Jones's Diary* は, 30 代未婚の女性を主人公にして世界的ベストセラーとなり, 社会現象をおこしたといわれ, 2001 年には映画も大ヒットをした。2015 年発刊の第三作 *Bridget Jones: Mad About The Boy* では, ブリジットは 50 代となっており, 2025 年にはそれに基づく映画も公開された。本稿はこの 30 年にわたるブリジット・ジョーンズに対する女性の共感を考察したものである。ブリジットは, 一貫して, 「人間らしく, 温かい心を持ち, 寛容である」。女性達はそうした彼女に共感し, 彼女が自ら選んでいく人生を気にかけているのだ。ブリジットは 30 年もの長きにわたって同時代を生きる現実世界の女性達の共感を失うことなく「変わらないままで」生きることができた稀有な虚構世界の女性なのである。

1. はじめに

1996 年に出版されたヘレン・フィールディングによる *Bridget Jones's Diary*¹⁾ は, 世界的ベストセラーとなり, 社会現象となったといわれ, 同年のブリティッシュ・ブック・アワードを受賞, 2001 年には映画化され大ヒットを記録した。続編となる第二作は, 1999 年に出版された *Bridget Jones: The Edge of Reason*²⁾ で, これも 2004 年に映画化されている。これら二作を併せて, 世界で 1500 万部以上販売され, 2007 年ガーディアン紙調査では, *Bridget Jones's Diary* は, *Catch-22*, *The Great Gatsby*,

¹⁾Fielding, Helen, *Bridget Jones's Diary*, Penguin, 1996.

²⁾Fielding, Helen, *Bridget Jones: The Edge of Reason*, Penguin, 1999.

1984 とともに 20 世紀を最も定義する 10 冊の一冊となった³⁾。2013 年 10 月、14 年もの長い空白を破って、第三作、*Bridget Jones: Mad About The Boy*⁴⁾ が発売される。2025 年にはその映画が公開された。筆者は 2007 年に最初の 2 作品と映画を併せて考察し、2015 年には、2007 年の論稿に第三作への反応を入れて再考察をした⁵⁾。本稿は、その 2015 年の論稿に 2025 年公開の映画を含めることで、30 年にわたるブリジット・ジョーンズに対する女性の共感についての考察とするものである。

2. 「世界中の女性に愛され共感される」女性像

1996 年発刊の *Bridget Jones's Diary* は、主人公ブリジットの「ブリジット的な生き方」が「世界中の女性の共感を呼んだ」「世界中の女性に愛された」と言われた世界的ベストセラーの小説で、映画も大成功をおさめた。小説では、日記スタイルでブリジットの一年にわたる日々が語られ、一人の女性の日々の出来事や気持ちが見えてくる。一方、映画では、語り手がブリジットではないため、彼女の考えや生き方は、他者とのやり取りを中心に伝えなければならないという制約はあるものの、小説でのブリジットの魅力を概ね維持しながら、映像メディアならではの強い感情移入できる利点を生かしてある。主人公像も恋の顛末も小説と映画では同じであるが、映画の最後には、小説に全く存在しないエピソードが使われてからハッピー・エンドに至るといふ急展開で、情緒的に強く働きかけるものとなっている。

この「ブリジットへの共感」の理由とは何なのかと考えてみる時、最初に、彼女

³⁾ “Return of the Singleton: With Bridget Jones’s Diary, Helen Fielding created a new female archetype, After 14 years, she’s brought Bridget back,” *Time*, October 28, 2013.

⁴⁾ Fielding, Helen, *Bridget Jones: Mad about The Boy*, Random House, 2013.

なお、上記の本の出版後、2016 年に 40 代のブリジットを描く映画 *Bridget Jones’ Baby* が公開され、続く 2017 年には同名の小説が出版されたため、主人公の年齢頃にシリーズ作を並べれば、これは 4 作目に位置付けられる。本稿では、作者が出版した順に基づいて、第三作としている。

⁵⁾ 青木順子 『虚構世界と現実世界—「小説を読む」と「異文化コミュニケーションを学ぶ」を繋ぐ』(5 章 pp.59-71, 大学教育出版, 2007), 青木順子 『虚構世界』と『現実世界』: 小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (8) —Bridget Jones への共感が示唆することとは— (英語英米文論集 第 24 号 2015, pp.43-70.) から抜粋。小説から原文を抜き出した場合は、3 作のうち、第一作は、原文の箇所の上に頁を記す、2 作目については 2—頁と表記、3 作目については (注) をつけている。抜き出された原文の後に付けてある邦訳は、すべて筆者自身による。

が等身大の女性の姿に見えていることが挙げられる。この等身大に見える理由を検証してみれば、第一には、彼女が、私たち大多数と同じで、完璧ではないことが挙げられることには誰も異論はないだろう。うっかりで信じがたいような間違いや勘違いをする、思わず弱気になり後悔する、日記では反省して頑張ると誓うが、結局同じことをしてしまう、反省しながら、同時に揺らぐ、と並べてみれば、「あ、『私』もある」ということは必ず見つかる。

次に「私」だと見える第二の理由として挙げられるのは、ブリジットの置かれている状況である。30代独身の彼女に無神経としか思えないようなコミュニケーションをまわりの人々は取り続ける。例えば、若い者を気遣うというスタンスで、“How’s your love life, anyway (p.10)”（恋愛は順調？）と会話に唐突に入れるジェフリーおじさんであったり、“You career girls! I don’t know! Can’t put it off forever, you know. Tick-tock-tick-tock. (p.11)”（もうあなた達キャリア・ウーマンときたら。永久に引き延ばすわけにはいかないのよ。ほら、チクタクチクタクって時間切れになるのよ）と言うお節介なウナおばさんであったり、結婚しているというだけで同年輩の独身者を論せる特権を持っているかのように“How’s your love life? (p.35)”と聞き、“once you get past a certain age... (p.36)”（「いったんある年になるとなあ」）と口をはさんだアレックスに、“Exactly... All the decent chaps have been snapped up. (p.36)”（その通り、まともな男はみんな取られちゃっているわけだ。）と結論付けるコズモウ、そして“**Yes, why aren’t you married yet, Bridget? (p.35)**”（「ねえ。どうして結婚しないの、ブリジット？」）という、答えなど本当は期待していないような質問をする彼の妻のフィオーナ、このようなコミュニケーションがブリジットの日常には溢れている。そして、読者もそれを自ら経験しているのである。

さらに、「私」もそうなのだという共感も、そうした無神経なコミュニケーションに対するブリジット自身の気持ちによっても引き起こされる。ブリジットは、感情を正直に書くことができる日記で、いかに彼女が腹立たしく感じたかを書き綴る。読者は、ブリジットの心情を吐露するコミュニケーションに共感するのである。そもそもブリジットは、無神経であり失礼極まりない彼らの優位なる結婚生活なるものに存在する脆さにも十分気づいている。小説で友達のシャロンに言わせている言

葉にあるように、独身であることは自分たちの本質的な不幸でなく、社会がそう思わせているだけだということは分かっているのである。

“And because there’s more than one bloody way to live: one in four households are single, most of the royal family are single, the nation’s young men have been proved by surveys to be completely unmarriageable, and as a result there’s a whole generation of single girls like me with their own incomes and homes who have lots of fun and don’t need to wash anyone else’s socks. We’d be as happy as larks if people like you didn’t conspire to make use feel stupid just because you’re jealous. (p.37)

(それに、生き方は一つってわけではないよ。4家族に1家族はシングル、王室なんてほとんどシングル、この国の若い男性って、調査によると結婚に全く不向きだし、結果として、私のようなちゃんと収入があって、持家があって、多に楽しみ、他人の靴下を洗う必要のないシングルの女性がまるまる一世代分いるのよ。羨ましいからってあなた達のような輩が私たちを馬鹿みたいに感じさせるような企みをしなければ、十分幸せなんだから。)

同時に、どんなに気づいても、自分に向けられた意地悪なコミュニケーションに完全に平静でいられるわけではなく、日記では動揺を吐露し、時には後で涙したことを告白する。30代独身としてのあせり、素敵な恋を経験し結婚へ成就させたいという思い、そうした思いを強く抱えながらも全くなえられていない彼女の状況、平静でいたいけれど存在するストレス、回りの人々の独身者への対応にある不公平さへの気づき、気づいていても揺らぐことは避けられない極めて人間的な感情 — これらが、同じ状況に置かれて、おそらく同じように気づき、その中でやはりプレッシャーを感じて揺れるしかない女性の共感を得るのであろう。まさに同じような状況にいる女性に「実は私もそうなのよ」と何度も大きく頷かせるのだろう。

3. ブリジットと「不公平なコミュニケーション」

前節の最後に挙げたブリジットを取り巻く「不公平」の存在についてさらに考察をすることで、ブリジットの直面するコミュニケーションを考えてみたい。言語学の本としては珍しくベストセラーにもなったといわれるタネンの本の批判を、『ことばとフェミニズム』で中村が以下のように紹介している⁹⁾。タネンは本の中で、男女の会話のルールが違うためにいかに誤解を生み不成功となるコミュニケーションをしているかを例を挙げて説明し、相手のコミュニケーションのパターンの理

⁹⁾ 中村桃子 『ことばとフェミニズム』勁草書房、1995。

解こそが可能なものであると解説しているのだが、こうしたタネンのアプローチは、社会で男性が優勢な地位を確保してきたことの影響を考慮していないという。同じく日本の大学生の英語テキスト用に編集されたタネンの本の一部にこんな例が出ている⁷⁾。ピーターとメアリーという若いカップルが一緒に住み始める。二人で家事を分担しようとしたが、じきにメアリーはピーターが自分の役割を果たしていないことに気づく。それを率直に言わないことで、かえって理解を阻害してしまう。タネンは、メアリーが自分自身の母親のコミュニケーションを真似て、遠回しなメタメッセージを送ることに問題があるとす。彼女の苛立ちがわからないピーターが問題ではないのである。こうした例からも、タネン自身は、女性と男性のコミュニケーションにおいて、実際になぜ女性が男性にそういうコミュニケーションをするようになってきているのかという背景や理由には関心がないのである。こうした現実の社会に存在する権力構造に批判を投げかけるような価値判断は全く示していないという批判に「“フェミニズム”や“男支配”は自分の研究分野ではなく」「強姦、妻に対する暴力、セクシュアル・ハラスメント、性的虐待を会話から生まれる誤解によって説明しようとしているのではない」とタネンは反論しているという⁸⁾。

タネンの上記の本から別の例を拾ってみよう⁹⁾。キャロルという女性が最近出会った男性と夕食をともにする。そこでは彼は無口であるのに対して、彼女は会話をうまく続けようと最善を尽くし、彼に多くの質問をし続ける。そして、夕食後“*It was nice having dinner with the FBI*”（「FBI との食事は素晴らしかったよ。」）という皮肉を言われる結果となる。タネンはこの事例を分析し、こう言う。「キャロルは興味を示すために質問をしたばかりでなく、相手には機関銃を撃つがごとくに感じられる方法で一大声の、早いペースで、省略語を多用して一聞いたのである。」こうしてキャロルが沈黙を破るためにした努力は忘れられ、多くの質問と早口の大きな声と省略した語というシグナルが、彼に自分が調査されているような思いを与えたことを、彼女の側のコミュニケーションの問題だったとタネンは説明する。しかし、こ

⁷⁾ Tannen, Deborah. *That is not What I mean*, 金星堂, 1987, pp.38-42.

⁸⁾ 中村, p.226.

⁹⁾ Tannen, pp.50-52.

の二人のコミュニケーションで明らかなのは、相手が困る程の沈黙を続けたこの男性が、相手にこれ程の努力をさせながら、責める側、非難する側に回れるとする、恐るべき男性優位の態度なのである。そして、タネンは一貫してそうであるように、この権力構造には全く触れることなく、反対に、そうした権力構造がスムーズに誤解なく働くように女性側に正しい認識を促している。

こうしたコミュニケーションにおける男女間の非対称性を「あいづち、うなずき」「沈黙」「割り込み」において検証した山田と好井による研究からは、以下のようなことがわかる¹⁰⁾。コミュニケーションの進行や相手のトピック展開にプラスまたはマイナス両方に働く「あいづち、うなずき」は、彼等の集計した男性と女性との会話のデータには多く見られるが、女性の方が相手のトピック進行に対する支持の「あいづち、うなずき」が多く、男性には非支持が多い。「沈黙」のうち、「自然な沈黙」は主に同性の間のコミュニケーションに見られるが、「関心の欠如を示す沈黙」については、異性間では男性の方が女性に対して頻繁に持つ。「割り込み」においても、同性間では主に対等におこるが、異性間では、女性は男性から圧倒的に多く割り込まれている。こうした結果が日常の中では隠れた形であるのは、彼等が言うように「これらの日常的な微細な差別的事実を、女性そして男性が無意識のうちに共同達成し、きわめて自然な会話の流れ、『男女間で協力してつくり上げた差別のない平等な個人同士の会話』として認定していた」からなのである¹¹⁾。

「きわめて自然な会話」の様相を呈するために、どちらかが努力を要求されているという権力構造は、性別の違う相手とのコミュニケーションばかりでなく、年齢の違う者とのコミュニケーション、外国人とのコミュニケーションなど、全てに見ることができる。どちらが協力をより要求されるのか、それは何のためにそうなるのか、どちらが文化において自然と感じる沈黙を維持する権力を持っているのか、どちらがそうしないとプレッシャーを感じさせられるのか、と見ていった時、コミュニケーションの生起する場の心理的負担の不公平さに気づくのである。

だからこそ、コミュニケーションの場の不公平さに気づかないまま、または気づ

¹⁰⁾ 山田富秋、好井裕明『排除と差別のエソノメトロジー』新曜社、1987、pp.222-250.

¹¹⁾ 山田、他、p.245.

いてもそれを享受し、無神経にブリジットの側に努力を要求する相手、こうした人々を経験している、権力構造の下位に位置している者は、ブリジットが度々日記で夢想してしまう「もしも私が本当にこう言ったら、一体どんなことになるのかしら」という言葉に大きく頷き、ブリジットに共感せずにはいられない。

4. ブリジットの「優れたコミュニケーション」

同じ状況に置かれている「私」、同じような「不公平なコミュニケーション」条件を押し付けられている者としての等身大の主人公像、そしてブリジットの心情の吐露への共感だけでは、「世界中の女性に共感される」とキャッチフレーズを付けられる程多くに愛され共感される主人公像、は生まれまいだろう。そこに何らかの読者が積極的に望んでいる性質、「ああ、『私』にもあるといい」と憧れをも感じさせる肯定的な「もの」、が存在するはずである。まず、彼女の完璧になりえぬ行動の後にいつも現れる、必ずポジティブに考えて明日に思考を向ける態度は確実にその一つであろう。しかし、こうした女性の主人公には私たちは多く出会っている。とすれば、ここまで強い共感の対象となったブリジットの魅力は他にもあるはずだ。

これについては、一貫して他者への悪意がないコミュニケーションを挙げてみたい。ブリジットは、他者の意図的な意地悪なコミュニケーションに対してさえも、一度も同様の意地悪さで持って応答することがない。仮装パーティーと誤解してバニーガールの格好で現れたブリジットに、マークの前でナンシーは、“Have you come from another party? (p.147)”（「別のパーティーからいらしたのかしら。」）と失礼な態度で聞くが、ブリジットは、“Actually, I’m just on my way to work. (p.147)”（「実際のところ、仕事に行く途中なんです。」）と答える。そして、4ヶ月後に会った時、“Not in your bunny girl outfit today, then, (p.203)”（「今日は、バニーガールの格好ではないのね。」）とブリジットの過去の失態を思い出させようとするナンシーには、“Actually we bunnies wear these in the winter for warmth, (p.203)”（「実際、私たちバニーは暖かさを求めてこれらを冬に着るの。」）とブリジットは答える。ブリジットが借りて身に着けているコートが昨シーズン物であることまで意地悪く指摘したナンシーに、何か言い返したいと思いつつも、結局、“Anyway, I’m sure you’re longing to circulate.

Nice to see you again. Bye! (p.204)”(「ともあれ、みなさんのところを回って行かれましたでしょう。お会いできてうれしいわ。さよなら。」)と言うのみで終える。ブリジットは、相手の弱みをつこうとする悪意のコミュニケーションに、同等のレベルの悪意のコミュニケーションを返すことは決してない。日記で彼女が書くように、実は彼女も他者の悪意に満ちたコミュニケーションに十分気づいていても、である。言い返してやりたかったとは書くものの、実際にそうすることが全くない彼女のコミュニケーションには、悪意を示す他者への反撃というコミュニケーションスタイルが全く存在しないと言える。

一方で、弱みを見せている他者には、彼女は他の人々よりずっと敏感に気づき、積極的に勇気付けさせる。英雄的な大げさなものではないものの、自分が気づく限りすぐに自然に実行するのである。独身者と既婚者という友達の集まりで、珍しく独身者が優勢な場で、出産後なのにも関わらず出産前なのかと独身者から聞かれて自分の体型にショックを受けた既婚の友達が、“Do I look that fat? (2-p.31)”(「そんなに私肥えて見えるのかしら。’)と不安そうに聞く。“No, you look great.” “Glowing. (2-p.31)”(「素敵よ。輝いている。’)とブリジットは間髪いれず答える。既婚の友達の無神経な言葉に傷つけられることも多いのに、このブリジットの一貫して善意が基底にあるコミュニケーションこそが、かくありたいもの — 自分には到底出来ないかもしれないけれど — と思わせる。彼女の日常的な失敗に共感し、彼女の置かれた不公平さに満ちた状況に共感し、彼女の日記に吐露される葛藤に共感し、その上で、いつも維持されるポジティブさやユーモアに加えて、この「優れたコミュニケーション」を軽々とやってしまう彼女のヒーロー的な魅力を、ブリジットを社会現象とした読者達は理解したはずである。

5. 2本の映画における共感度の差

前節に記したブリジットの「優れたコミュニケーション」は、小説に基づいた映画2本への共感度の差を見ることでも説明できる。映画では、一作目の映画での共感度が弱まった気がしたのは、私だけではないはずだ。シリーズにつきもののマンネリ化はもちろん理由にあるだろう。しかし、原作の小説を読む限り、彼女にある

共感の秘密と思われるものは2作目にも全て残っており、小説一作目と同じ程度に共感できるブリジット像が存在して、コミュニケーションパターンも同じである以上、映画の2作目でも、もう少し一作目に近い程度にブリジットに共感を覚えてもよいはずだった。映画自体も、第一作と同じように、小説の基本的な流れは守りながら、ブリジットに共感している者たちであれば、映画ならではの最後の劇的な展開のシーンで、強く感情移入するように設定されている、にもかかわらずである。一作目と同じ程度の共感を覚える2作目の小説と比べ、映画は、なぜ一作目に比べてブリジットへの共感度が弱いものになったのかについて、小説から2作目の映画に残されなかった点を追いながら考えてみようと思う。

比較してみると、2作目の映画では、小説から残すべき要素と映画で発展させるべき要素を取り違えてしまったように見える。一番大きなことは、ブリジットを愛した人々が魅了された、彼女のコミュニケーションの魅力を強調していないことであろう。日記の記述の中で明らかな、うっかりで、失敗も多く、時々落ち込み、独身のままでいることに引け目も感じ、体型についてもコンプレックスを持っている30代の女性への自分と状況が似ているがゆえの共感、共感の理由の一つに過ぎないのである。ブリジットという女性の最大の魅力とは、前述したように、彼女は、他者を陥れる、または貶めて自分を上げるという悪意のコミュニケーションはせず、善意がそのコミュニケーションの基底にある。羨ましがったり、憧れたりする気持ちがあったとしても、あるいは、時には腹を立て言い返すことがあったとしても、彼女には、他者を貶める意図がないから、誰かを蹴落とすためのコミュニケーションは存在しない。一作目の小説で、恋のライバル的に出てくる二人の女性のコミュニケーションは、そうしたブリジットと対極にある。これらは一作目の映画でもきちんと残されていた。ダニエルのアメリカ人の恋人は、家でブリジットと遭遇した時、すでに惨めな状況に置かれているブリジットに、駄目押しのように、以下の言葉を投げかける。“I thought you said she was thin. (p.153)”（「彼女ってやせているって貴方は言ったと思ったけれど。」）二人の間で話題になっていても支障がないような存在にしか過ぎない自分、ダニエルが「やせている」と偽って言っておきたいような恥ずかしい体型の自分、という二つの苦い思いをブリジットに同時に引き起こす

ことを意図した、悪意に満ちた、しかし巧みな攻撃のコミュニケーションであり、これは映画にそのまま残されていた。マークを狙っているナンシーは、小説では、幾度となく、ブリジットを攻撃する。映画でも、彼女のコミュニケーションの攻撃性はきちんと存在していた。

2作目の小説でも、そうした他の人々への競争心むき出しのコミュニケーションと、そうでないブリジットのコミュニケーションは対比的におかれている。2作目で恋のライバルとして登場するレベッカは、容姿端麗な自分が、平凡な容姿のブリジットと比べていかに若く見えるのかを知らしめようとして、大勢の前で子どもに聞く形で、自分の思い通りの答えを引き出そうとする。“Who do you think is older, me or Mummy?” “Who do you think is older, me or Bridget? (2--p.194)” (「どちらが年上だと思う？私、それともママ？」「どちらが年上だと思う？私、それともブリジット？」)。成功はしなかったとはいえ、際立つ巧妙さである。ところが、一作目の映画では原作とほぼ同じ設定で登場したブリジットの恋のライバル、ナンシーと違って、2作目の映画では、そうしたライバルであるレベッカの設定を小説から変更している。映画でのレベッカは、実は彼女自身がブリジットに恋をしているために意味深に見える言動をし、勝手にブリジットから恋敵と勘違いされるだけで、意地悪で競争心の強い女性としては登場しない。ブリジットの善意を基底にしたコミュニケーションと対照的な悪意のあるコミュニケーションをする女性がライバルとして登場しない映画では、ブリジットのコミュニケーションの美德が小説ほどには引き立たないのである。

私達がコミュニケーションをする時、相手とのコミュニケーションによって、気持ちよく感じたい、嫌な気持ちにはなりたくない、という願望がある。同時に、自分に向けてはそれを望みながら、他者にはそう出来ない者もまた多いのである。けれども、ブリジットにはそれが出来る。結局、小説では一作目でも2作目でも、多くの失敗や葛藤の場面でのブリジットの応答に、作者はブリジットのその優れた点を巧妙に入れ込み、恋の相手である有能な弁護士、非の打ち所のない紳士であるマークに、コミュニケーションの場でそれを発見させていく過程を自然なものとして見せているのである。彼は、ブリジットに意地悪を言う恋敵に同じようには悪意で

もって応答しないブリジットの会話の場に度々同席し、ブリジットのコミュニケーションの性質に気づいている人物として描かれている。意地悪なライバルの悪意のコメントが空振りした時、ブリジットがブリジットらしく応答をした時、吹き出すのはまずマークであり、こうしてブリジットの良さを彼が発見する場面は、彼には読めない（と想定されている）日記の記述でブリジットの美德をすでに発見してしまっている読者にとっては、胸がすかっとするような瞬間となる。

2 作目の小説で、パーティー会場で、ブリジットにない全てのものを持ちながら、ブリジットのコミュニケーションの美德だけは持たないレベッカが、マークに誘いをかけてこう言う。

“Don’t you think,” she was saying. “Don’t you think it’s perfectly possible for two people who ought to be together, a perfect match in every way—in intellect, in education, in position—to be kept apart, through misunderstanding, through defensiveness, through pride, through...” “the interference of others and end up with the wrong partners. Don’t you?” (2–p.323) 「思われませんか？」と彼女は言っていた。「一緒にいるべき二人の人間が、すべての点、知性でも、教育でも、地位でも、完璧に釣り合うのに、誤解したり、防衛的になったり、誇りのために、離れている、そういうことがありますよね。」「他の者に邪魔されて、ふさわしくない相手といるってこと。そうあなたは思われませんか？」

それに対するマークの返事は簡潔である。“I need Bridget. (2–p.323)”（「僕はブリジットが必要なんです。」）そのブリジットと言えば、同じパーティー会場で、ボーイフレンドと一緒に幸せそうに見える親友の様子に、“She deserves it. (2–p.323)”（「彼女はこれに値するわ。」）とやさしい気持ちで見入っている。そのブリジットを知っている読者には、マークの言葉ほど、納得でき、うれしいものはない。小説では、その後、パーティーの最初は揉めそうになっていた友達夫婦が仲直りをして踊っているのを、10 年間共に人生を共有したものだけが見せる調和の取れた幸せな姿だとブリジットは温かく見守りながら立っている。そこにマークが声をかける。“Want to dance? (2–p.324)” —ブリジットを愛する者が、「彼女こそ、これに値する」と思いながら、にっこりした瞬間の一つであろう。映画でも、レベッカの性質を小説から変更しないで、この見事にコントラストを見せるレベッカとブリジットのパーティー会場のコミュニケーションを是非残して欲しかったと思う者は、私一人ではないだろう。

6. 映画で強調された「自己決定権」

前節で述べた2本の映画の共感度の差の、もう一つの理由は、小説にない形で導入された一作目の映画と2作目の映画での、主人公ブリジットの「自己決定権」の性質の違いにあると考えられる。小説も映画も一作目では、ブリジットは、勤務先の上司のダニエル・クリーヴァーとの恋愛に破れ、やり手の弁護士マーク・ダーシーとの恋愛を成就させていく。小説では、日記であるために、ダニエルとの恋が終わり、初めは偏見を持つ程遠い存在に感じられたマークの良さがわかり、同時に、相手がブリジットを憎からず思っていることがわかるという過程が淡々と進んでいく。もちろん彼女が自分自身の行動を選択していくのだが、映画はあえて決定的な言葉を彼女に言わせることで、彼女自身の選択という要素を強調する。気にかかる存在となったマークへの偏見もまだ解消していない。しかし同時に、自分の元へ戻ってこようとするダニエルの安易な復縁の申し出も受け入れることができない。その瞬間、ブリジットは、一人であることを自ら選ぶ。立ち去るマークを見送った後で、ダニエルの誘いも断る。あれ程良き伴侶に恵まれないまま独身であることを怖れていたはずのブリジットが、一人であることを自ら選んだという点に、彼女への共感度は強く増すのである。映画では、こんな言葉である。

Daniel: Let's go back upstairs. Come on. We belong together, Jones. Me, you...poor little skirt.

Bridget: Right.

Daniel: If I can't make it with you, I can't make it with anyone.

Bridget: That's not a good enough offer for me. I'm not willing to gamble my whole life on someone who's not quite sure. It's like you said, I'm still looking for something...more extraordinary than that.

（二階に戻ろうよ。さあ。僕らは同類なんだよ。ジョーンズ。僕と君、かわいい小さなスカート。「そうね。」「もし君とやっていけなかったら、僕は誰とでもやってはいけないうらね。」「これは私には十分な申し出ではないわ。自分のことが確かでない人に私自身の人生をかけるつもりはないの。あなたも言ったでしょう。それよりもっと素晴らしい何かを、私は今も求めているのよ。」

映画の最後で、ブリジットは、自分からマークの胸に飛び込むという行動をするが、上記のような状況で一度は自らの決定権を行使して、一人でも生きようとしたからこそ、最後はマークを文字通り追いかけて、ハッピー・エンドを手繰り寄せたブリ

ジットに、強く共感するということになる。

2 作目の小説も、淡々と日記の形でブリジットの口から生活が語られ、恋の展開があり、破局かと思われた後仲直りする。そうした過程そのものは、一作目の小説同様ハイライトがあるわけではない。映画では、そこで、一作目と全く同じように、ダニエルの再度のブリジットへの求愛のシーンと、それをブリジットが拒絶するシーンを入れている。しかし、それは、本質的に、一作目の映画のシーンとは違う意味合いを持ってしまう拒絶なのである。まず、ダニエルは、求愛とはいえども、2 作目では、タイでのブリジットとの一夜を求めているだけであり、ブリジットにしても、ダニエルがいかにも不埒な男かを証明するような出来事が偶然起こったから、結果的にダニエルの誘いを拒むことになる。この拒絶の場合は、ブリジットが「自己決定権」を断固たる態度で行使したとは言い難く、一作目との自己決定権の行使による拒絶との違いは明瞭である。映画の最後にも、誤解し続けたブリジットが、自分からマークの元に走って飛び込むという、一作目と同様のパターンを取らせるが、そのブリジットの行動が、一人でも自分らしい幸せを求めて生きていく強さを示さなかったタイの夜の中途半端な拒絶の後では、見ている者のブリジットへの共感度が弱まるのは当然である。せっかく小説にないエピソードを入れ込んだにもかかわらず、ブリジットへの共感度という点では逆に働いたことになる。

自分らしくあるためには一人であることを自ら選ぶことができる女性であることが共感をよぶ、ということ、2 作とも少なくともわかって前提にしているのである。確かに、展開だけなら似たように見えるだろう。男性の申し出を断ることで一人であるという選択をするという事実だけを取れば、である。しかし、上述したように、その拒絶に至る理由が違う以上、行為の表面に騙されるほど世界中のブリジットに共感した女性は愚かではないのである。

7. 変わらないコミュニケーション条件

1990 年代の社会現象とされた *Bridget Jones's Diary* の下地に、19 世紀の英文学作品 *Pride and Prejudice* (『高慢と偏見』) が使われているのはよく知られていることである。*Bridget Jones's Diary* 発刊 の 2 年後、1998 年にヒットした米映画 *You Got Mail*

にも、*Pride and Prejudice* を意識させながら、競争相手となった男性には偏見を持ち避けている一方、正体を知らずに同じ男性に電子メールをやり取りして恋をする女性の恋愛が描かれている。19世紀に存在していた男女の人間関係が、時を経て、男性の優位だけは何ら変わることなく、20世紀の最後、*Bridget Jones's Diary* や *You Got Mail* における人間関係となり、何の疑問も持たれず自然なこととして受け入れられる。現代のロンドンの街、素敵な恋愛を求めている、ごく普通の会社員の30代の女性ブリジットにも、アメリカのニューヨークの下町で、理解できる男性を求めて、本屋を経営する独立心の強い女性にも、*Pride and Prejudice* での「優れた男性」に恋をし「気後れする女性」、または、男性の素晴らしさにしばらく気づけない点では「偏見を持ち愚かである女性」という構図が成り立つのである。

反対に、「優れた女性」に恋をし「気後れする男性」といった構図が珍しいことは、*Bridget Jones's Diary* 映画公開年から3年後の2004年に日本で大ヒットした小説で映画化もされた『電車男』の例を見るまでもなく、明らかである。*Pride and Prejudice*, *Bridget Jones's Diary*, *You Got Mail* にあるような、優れた男性に最初は偏見を持ち、最後は男性の良さがわかっていく女性という構図が自然だと感じてしまう社会は今も存在している。だから、この3作品のストーリー展開を自然に感じるのでもある。個人の持つ夢は文化の中で形成されるわけで、それがたとえ文化に浸透している不平等さの反映であっても、似たようなロマンスへの夢を共有してきた女性を、これらの小説、そして、映画は魅了するのである。その上で、コミュニケーション条件の不平等さについて鈍感ではない自分をいつも持ち続け、そうした条件の中でも優れたコミュニケーションをしていく主人公に魅了されたのである。例えば、ブリジットは、小説でも、映画でも、いわゆる一般常識の欠如が強調される。ドイツがどこにあるのか言えなかったり、ランボーを知らなかったり、といった具合である。そうした欠如も、女性である時のみ愛らしいこととされ得る。それは女性にとっては都合の良いことでも嬉しいことでもなく不当なことなのだと少なくとも気づき、その上で、ブリジットのような他者への悪意を示すことのない者のコミュニケーションは、例えば、ドイツの位置を言えないで迷うブリジットの知性や常識とは全く別の次元、いわば人間の資質として優れていることからくることをしっかり

と理解してたいのである。完璧でないからというだけでなく、失敗の後でポジティブに考えるからというだけでもなく、社会で不公平なコミュニケーション条件を課せられているからでもなく、ともかく優れたコミュニケーションスタイルをブリジットが一貫して持っているということこそが、「ブリジット的生き方」として「世界中の女性の共感をよんだ」のであり、「世界中の女性に愛された」のだと、平等なコミュニケーションの実現を望む多くの世界中の多くの女性のためにも信じるべきなのである。さらに言えば、映画の一作目に付け加えられた「自己決定権」の強調 — 自分を大事にしてブリジットが自ら一人であることを決定し選択したシーン — に共感し喝采をおくったけれども、2作目の映画に付け加えられたタイの夜のブリジットの安易に揺らぐ心には共感できなかった女性達は、そして、私もまたそうなのだが、そうしたブリジットの優れたコミュニケーションは、誰のためでもなく、ましてや誰かに選ばれるためではなく、自分が自分らしくあるために選択されるべきなのだと言っているのではないだろうか。

8. 第三作への「反応」が示すこと

第一作から17年、第二作から14年という月日が経った2013年、ブリジットの3作目となる *Bridget Jones: Mad About The Boy* が刊行された。原作からの月日と同じく、30代の独身だったブリジットは、50代に突入。2作目の終わりで、読者がそうなるのだろうと信じた通り、マーク・ダーシーと結婚し、今や二児の母親となっている。ブリジットのファンだった女性達を驚愕させたのは、スーダンでのマークの事故死という設定で、ブリジットは第三作の始まりから、すでに5年間一人であることだろう。51歳、再び恋の戦線に戻ろうと決意するブリジットの悪戦苦闘が最初から主となるというストーリーは、おそらく、過去2作でブリジットのファンだった者が全く想像していなかったものであり、発売前から多くのファンの不満が聞かれることになる。しかし、すでにこの物語の始まりからそうなのであり、死後5年の月日を経て、ブリジットがそうであるように、読者もまた、マークの喪失という感傷にほとんど浸ることは許されないまま、ブリジットに再会するしかない。

50代に入ったブリジットはどのような変化を遂げているのか。それについては、

答えは一つしかないだろう。ブリジットは変化をしていないのである。勘違い、うっかりの連続、努力しては失敗、がっかりし、それでも前向きに、精一杯また頑張る、といった格別自分達と違うとは思えないように見えることも、世の中の一般には常識的な事柄に時々抜けたように疎いところも、誰にも悪意のあるコミュニケーションを取ることがないところも同じである。第三作に対する書評は、様々な出来事に対処しようと奮闘するブリジットの愛すべきキャラクター自体は以前と変わらず健在であることを認め、コメディックな小説の魅力も今回も存在するとして、ある程度の評価を与えるものと、51歳になったブリジットの行動が全てにおいて30代の時と同じであるように見えることに失望し、それゆえ本来笑いを誘うように散りばめられたエピソードをもはや楽しむことは出来ないとするものに分かれているとってよいだろう。以下、そうした書評を分析しながら、小説への反応は何を意味するのかについて考察してみたい。

まず、厳しい反応がおこる理由と考えられることを大きく3つに分けてみたい。言い換えれば、これは、最初の2作品と同じようなブリジットを発見しても、同じようには共感できない女性達が存在する理由でもある。

まず第一に、マーク・ダーシーの死という設定そのものに対する反発である。読者の反応は特に手厳しく、それゆえにこの続編を最初から認めないというファンもいれば¹²⁾、マークを存在させていれば物語がどれほどよかったかを語る者もいる¹³⁾。自らを重ねていたはずのブリジットの素晴らしいパートナーを失うことは確かに

¹²⁾ “Fans took to Twitter to express their shock and sorrow about Mark Darcy’s demise

After the news of Darcy’s demise broke, one contributor to the book reviews website Goodreads wrote: ‘After the revelations by author Helen Fielding this weekend, I won’t be reading this or any other new HF book ever again. I have been so excited about hearing what Bridget has been up to and to hear that HF has destroyed the story of Bridget Jones and shown such a lack of respect to fans is just unbelievable!!’ Another wrote: ‘Mr. Darcy is dead?! I hate it! Toyboy for Bridget. Ridiculous!’ while another disappointed fan wrote: ‘I am no longer interested in reading this book.’ (“A ‘toe-curling, clunking disappointment’: What reviewers are saying about the new Bridget Jones book (Clue: it’s not v gd),” *Mail On Line*, October 8, 2013)

¹³⁾ “How much more fun would it have been to have a glimpse of Bridget and Mark’s married life? The romance of the newlyweds (Bridget organising her wedding would have had great comic potential - would she have turned into a Bridezilla or just so relieved to have made it out of singledom she would have spent her entire day trying to get her still-single friends to get together?) making way to happy - or otherwise - domesticity. (“A ‘toe-curling, clunking disappointment’: What reviewers are saying about the new Bridget Jones book (Clue: it’s not v gd),” *Mail On Line*, October 8, 2013)

ショックであろう。しかも、彼はまさに多くの女性の理想的な相手である条件を持って、女性ファンに愛されていたわけである¹⁴⁾。作者フィールディング自身も、これだけ愛された登場人物をシリーズで死亡させるという決断の重さは認める一方で、それはブリジットの続編を書く以上は「必要だった」と言う¹⁵⁾。人生には、若い頃には想像さえしなかったような出来事が次々と起こるわけで、第三作でフィールディングが書きたかったのは、ブリジットの家庭や結婚生活についてではなく、ブリジット自身がそうした人生の試練を切り抜けていくことについてであるからである¹⁶⁾。この作者の意図を理解し、さらに、マークが不在でもブリジットへの共感は存在するとする者にとっても、実際にマークの不在の大きさは埋めがたいほど大きく感じられる¹⁷⁾。

次に、マークの死という設定への不満はひとまず置いておいたとしても、30代独身者ではなく、50代に入ったのに、全く同じまま、恋に迷い、泣き、努力して、という恋に関わる騒動の連続に、ブリジットは成長していないではないかと失望する

¹⁴⁾ Helen Fielding must be a confident woman. By killing off Darcy, she has done the equivalent of a horse-trainer euthanizing his most successful, crowd-pleasing thoroughbred whilst hoping the punters will still come to the races. Darcy is female fiction's ultimate romantic archetype: the handsome, all-capable man who is tortured by a passion that he must restrain in the interests of honor and duty. A man who, despite his pedigree, loves the ordinary plucky girl but struggles to show it; a man who can provide chapter after titillating chapter of misunderstanding, yearning, hope." ("Mark Darcy is Dead! British Bridget Jones Fans: It Had to Happen," *The Daily Beast: Books* 10.14, 2013.)

¹⁵⁾ "How many writers create characters that people still care about after so long and feel such ownership of?... The world changes, people have tough stuff to deal with in life. There are dark notes and light notes, we all get through by supporting each other and laughing when we can. That's how Bridget operates—like one of your friends." ("The Bridget Jones effect: how life has changed for the single woman," *The Guardian*, December 20, 2013.)

¹⁶⁾ "Fielding said she had no choice but to kill Darcy so Bridget's story could move on. 'The book I wanted to write was not about domesticity, married life. It was about Bridget struggling with what life throws at you,' Fielding said over lunch at the London gastropub where she likes to write in the daytime. 'It was Bridget being single with two children in the age of technology. And rediscovering her sexuality. She was a mother and she lost it amid the nappies and the busy-ness. I think lots of women go through that.'" ("Colin Firth upset, amused Mark Darcy is dead in '*Bridget Jones: Mad About The Boy*,' Helen Fielding, *AP*, October 14, 2013.)

"'Life is 'not all sailing along marvelously, nor is it 'Oh, we're in a well of despair.' People hit tough times, and then their friends get round them and cheer them up and then they keep bugging on.'" ("Colin Firth upset, amused Mark Darcy is dead in '*Bridget Jones: Mad About The Boy*,' Helen Fielding, *AP*, October 14, 2013.)

¹⁷⁾ "The answer, of course, is Helen Fielding's humor and laser-sharp observational skills. The appeal of her books was never simply the romance but her ability to define and send up the female neuroses of an entire generation... She still has the skill to make women laugh, cry, and identify. But without Darcy, they may not be quite as vested." ("Mark Darcy is Dead! British Bridget Jones Fans: It Had to Happen," *The Daily Beast: Books* 10.14, 2013.)

という反応である¹⁸⁾。そこには、理想的なパートナー、マークを悲劇的に失った後で、彼女の葛藤が愛、セックス、孤独という過去と同じことになっていることへの不可解さも存在する¹⁹⁾。35歳、太り気味のブリジットが、恋のためにも体重を減らすことに努力しなければと決意をしていた時は、十分彼女の心情に共感を重ねたのに、幸せにマークと結婚し二児をもうけた後の51歳の彼女が、再び恋の戦線に戻るのに、痩せるべく努力し、不慣れなソーシャルネットワークに急遽参加をしようとすることも、である。この50代の「在り得ない」恋については、今や50代になっているフィールディング自身も、かつては、中年女性に対してそうしたステレオタイプを自分が持っていたことを記している²⁰⁾。多くの読者もまた作者と同じであり、そして、それゆえ、そうした読者には、今回のブリジットは実在しない人間のように思えるのであろうし、そうなると、30代の頃と変わらない51歳のブリジットの恋のドタバタには、共感どころか、むしろ引いてしまうことになる。言い換えれば、それもありだと読者が納得する状態に引き込むことに作者が失敗したわけである。となれば、在り得ない恋の顛末にまつわる小説の笑いを取るはずの箇所は読者には笑えないわけで、過去存在したブリジット自体の魅力さえも消えてしまった

¹⁸⁾ “What’s harder to tolerate is the fact that Bridget Jones has lost a good deal of her charm... Bridget was messy, adorable and real. Now she’s a strange hybrid — messy, yes, but sometimes embarrassing and not authentic. It’s not that aging has to be grim, but it may require a new form for it to be funny.” (“Bridget in Middle Age: We’re Not So ‘Mad About’ This Girl,” *NPR Review*, October 16, 2013.)

¹⁹⁾ “Which is part of the problem: Bridget has been given such a tragic backstory, and the very grown-up burden of young fatherless children, that there’s less traction to be had from dating niggles; and with so much darkness there already, Fielding seems unwilling to write any more in. There’s a new sentimentality, even slushiness, to her old subjects of love, sex and loneliness; the familiar jaunty tone is reserved for playground politics and the chaos and cuteness of bringing up children.” (“*Bridget Jones: Mad About the Boy*” by Helen Fielding – review,” *The Guardian*, October 7, 2013.)

²⁰⁾ “When I was in my 20s, I couldn’t imagine that life would continue beyond 40, really,” she added. “I couldn’t imagine there would still be dating and going out and getting drunk with your friends and worrying about calls or texts that hadn’t come, and what to wear” (“Colin Firth upset, amused Mark Darcy is dead in ‘Bridget Jones: Mad About The Boy’: Helen Fielding, AP, October 14, 2013.)

ように感じるという手厳しい書評も当然のように出てくるのである²¹⁾。

三つ目に、恋愛という事実だけでなく、今まで同じようなブリジットのコミュニケーション自体が、51歳のブリジットにはとても許し難いと感じるというものもある²²⁾。恋の優先、仕事への態度、うっかり、勘違い、失敗、こうした前には笑えたことが笑えないのは、ブリジットが、51歳でそうした行動を取ることをお気楽過ぎて未成熟と感じるからである。必然的に、時代の変化についていこうとしてツイッターやフェイスブックを使いこなす悪戦苦闘程度はかろうじて笑えたとしても、他の箇所では、とても前のように共感をこめて笑えないことになる。物語自体が今や

²¹⁾ “What’s harder to tolerate is the fact that Bridget Jones has lost a good deal of her charm. . . But it doesn’t all hang together in the hilarious, breezy way these books used to. I found myself pining for Young Bridget.” (“Bridget In Middle Age: We’re Not So ‘Mad About’ This Girl,” *NER reviews*, October 16, 2013) He was so masterful, he was such a MAN!” she thinks, as they kiss for the first time, at which point, having struggled loyally through 300-odd pages, I knew it was over for Bridget and me. It’s not that I want her to be lonely. But couldn’t she be less of a throwback? (“On the shelf: Bridget Jones and other literary singletons,” *The Guardian*, October 11, 2013.) “*Mad About the Boy*, rather oddly for a novel that purports to be comic, is shot through with a horrible, paralysing fear. What’s the only thing more hopeless and terrifying than a woman who hasn’t got a man? Answer: a woman who’s too lazy, complacent or, God forbid, serious-minded to put time and effort into hanging on to the man she’s already got.” (“On the shelf: Bridget Jones and other literary singletons,” *The Guardian*, October 11, 2013.)

²²⁾ “In so many ways, Bridget seems to be stuck at 30, as preoccupied with her appearance and as desperate to impress as ever, when a little more hard-earned wisdom and maturity might actually do fifty something women more justice. Essentially, for all the book’s cheery silliness, quickfire banter and waspish observation, for all you root for Bridget, as vulnerable and inappropriately honest as she ever was, *Mad About The Boy* never quite fulfils its own potential.” (“Darcy’s gone but will Bridget Jones ever grow up?” *Express Book News*, October 17, 2013.) “No wonder, then, that it is such a shock to find her so much unchanged, even at the age of 51 and a widow to boot. Most of us wouldn’t want to return to our 30s for all the chardonnay in the Majestic Wine Warehouse, even if our skin was a little peachier then. We’re glad to have put all that shyness and confusion and misery behind us, and we have stuff to do: some of us, amazingly, even have careers. Yet here Bridget is, still writing out tragic lists of Dating Rules (“On the shelf: Bridget Jones and other literary singletons,” *The Guardian*, October 11, 2013.) Bridget Jones has now become ‘foolish’ and unreal’ while Daniel Cleaver makes just tantalizingly brief appearances. The beginning is ‘toe-curling’, the first two-thirds are like listening to someone who once had perfect pitch but now can’t sing a note and overall the book is ‘v disappointing’. (“A ‘toe-curling, clunking disappointment’: What reviewers are saying about the new Bridget Jones book (Clue: it’s not v gd),” *Mail On Line*, October 8, 2013.) * *The Daily Telegraph* の書評から。

魅力を欠いているのである²³⁾。

一方、好意的な反応の理由は、互いに関連しあう二つの理由に集約できるだろう。まず主人公であるブリジットへの強い共感の存在である²⁴⁾。ブリジットは確かに全く変化していない。それゆえ、ブリジットは、30代でそうであったように、彼女らしい魅力的なコミュニケーションをもって、女性達が共感を持ち愛することが出来る主人公であることには変わりがないということになる。3作目の発表に先立って、フィールディング自身が、ブリジットの魅力の永続性の理由は、彼女の「人間らしさ」であり、ブリジットが何かを達成するとするなら、美しい外見や巨大なハンドバッグを抱えていることは、「人間らしく、温かい心を持ち、寛容である」ことより重要ではないと語っている²⁵⁾、その言葉通り、第三作でも、ブリジットの人間らしさを作家は最優先に置いたということであろう。そうであれば、当然、年齢や環

²³⁾ “‘It isn’t just the style that jars,’ wrote its reviewer Christina Patterson, ‘the random capital letters, the subjectless sentences, the mannerisms that now seem awfully tired... It gets worse: Patterson says the book is ‘deeply uneven’ as well as emotionally inauthentic and a brand which has ‘lost its shine.’... It’s the fact that I hardly believed a word of it. I didn’t believe that a 51-year-old woman would tot up the number of minutes she’d spent on Twitter, and spend meetings about her own film script sending saucy texts. (“A ‘toe-curling, clunking disappointment’: What reviewers are saying about the new Bridget Jones book (Clue: it’s not v gd),” *Mail On Line*, October 8, 2013.) * *Sunday Times* の書評から。 “The tone is all wrong. Reading the first two thirds of *Mad About the Boy* is like listening to someone who once had perfect pitch, but now can’t sing a note. It lies as flat on the page as its heroine’s overcooked spaghetti.” “You feel the weight of that worry as Fielding takes the staples of modern life – remote controls, tweeting, texting, online dating – and strains to make anything of them. (“A ‘toe-curling, clunking disappointment’: What reviewers are saying about the new Bridget Jones book.” (Clue: it’s not v gd),” *Mail On Line*, October 8, 2013.) * *The Daily Telegraph* の書評から。

²⁴⁾ “Fielding beautifully conveys the constant seesaw of emotions a parent feels toward the young and demanding..... This is romantic comedy – chick-lit–but its big heart, incisive observations, nice sentences vivid characters and zippy pace make it a book you could happily spend the night with. (“Will Have Small glass of Wine,” *The New York Times Sunday Book Review*, October 18, 2013.) “Great comic writers are as rare as hen’s teeth. And Helen is one of a very select band who have created a character of whom the very thought makes you smile.” (“Review: *Bridget Jones: Mad About The Boy* by Helen Fielding,” *The Sweet Bookshelf*, October 25, 2013.)

²⁵⁾ “Introducing the novel to the Guardian book club earlier this month, Fielding attributed her heroine’s enduring appeal to “just being human” in the age of air-brushed photos. “In the media age we’re inundated with images of physical perfection,” she said. “If Bridget has achieved anything it’s to show that looking pretty and carrying an enormous handbag is far less important than just being human, warm-hearted, and kind.” (“Bridget Jones dates her way to the top of the Christmas hardback fiction charts,” *The Guardian*, December 11, 2013.)

境の違いでブリジットが直面する出来事は変化していても²⁶⁾、そして、明らかに読者の誰も歓迎はしなかったマークの不在はあっても、それでも、ブリジットが引き起こす騒動を十分楽しく受け止められるということになる。“grown-up Bridget’s grown-up concerns”²⁷⁾として受け止められる、その共感の対象には、年齢がいったゆえに起きたブリジットと母親との間のエピソードも含まれるだろう²⁸⁾。悲劇的な出来事をマークの死で経験したがゆえに、前作まで存在しなかった“poignancy”がブリジットに存在し²⁹⁾、それゆえに、彼女の不安を抱えた、より人間的な姿に、涙さえ出る³⁰⁾。当然、前の2作品と同じように、結末の幸せも自然と心から喜ばしいこととなる³¹⁾。

第二の理由は、上記の内容と必然的に関連することなのだが、ブリジットを生き生きと描くフィールドイングの作家としての力は今回も健在であることである。時代と文化を鋭敏に読み取り、人々が密かに描いている虚栄や自惚れを優しく風刺す

²⁶⁾ “new things I wanted to write about: unexploded email box bombs, tweeting, Botox, over-stuffed lives, online dating, how to lose your born-again virginity, juling work and parenthood, the way the image of (ugh) the ‘middle-aged’ woman is as outdated and mean as the tragic barren spinster was when Bridget was first struggling with it.” (“The Bridget Jones effect: how life has changed for the single woman,” *The Guardian*, December 20.)

²⁷⁾ “Will Have Small glass of Wine,” *The New York Times Sunday Book Review*, October 18, 2013.

²⁸⁾ If you don’t cry when Bridget’s mum suddenly stops “soldiering on” with Una and admits how lonely she is as a widow, you have a heart harder than Daniel Cleaver’s. “It was the first time I’d actually felt Mum’s bouffe,” relates Bridget, as they hug each other on her kitchen floor. (“Bridget Jones: Mad About the Boy by Helen Fielding-Review,” *The Independent*, October 13, 2013)

²⁹⁾ “But she uses these darker notes sparingly; Bridget’s very British determination to “Keep Bugging On”, as she puts it, nudges the tragedy to the periphery most of the time, but it does give the character a poignancy she lacked before.” (“*Bridget Jones: Mad About the Boy* by Helen Fielding-review,” *The Observer*, October 12, 2013.)

³⁰⁾ “But she is also very human, with all her insecurities, and if you don’t shed a few tears in the course of this book, you must have a heart of ice.” (“*Bridget Jones: Mad About the Boy* by Helen Fielding-review,” *The Observer*, October 12, 2013.)

³¹⁾ “Bridget finally trolls Amazon for comfort with both missing Darcy and navigating life as a middle-aged single mum. You can understand her instinct to just bury herself under the covers and quietly waste away. But she forges onward, in fine Bridget fashion, and the book’s ending is an unexpected, sweet surprise. Bridget fans certainly won’t be disappointed here. Helen Fielding: Please don’t make us wait another 13 years for *Bridget Jones: Grandma’s Revenge*.” (“Book review: ‘Bridget Jones: Mad About the Boy,’ by Helen Fielding,” *Dallasnews*, December 20, 2013) “Even so, those of us who loved her the first time will be glad to welcome her back – big pants, fillers and all,” (“*Bridget Jones: Mad About the Boy* by Helen Fielding-review,” *The Observer*, October 12, 2013.)

るのに長けた筆致は相変わらずである³²⁾。現代文化への言及は相変わらず冴えており、テーマも魅力があれば、今や「文化の言及対象そのものになったブリジット」も彼女の筆にかかれれば相変わらず可笑しい³³⁾。

9. 反フェミニズム

小説に賛否両論はつきものである。この第三作もそれは免れ得ない。続編がこれだけ多くの人々の関心呼び、メディアに取り扱われ、議論を呼ぶことが、「ブリジット・ジョーンズ」という社会現象の大きさを示しているといえる。だからこそ、社会現象と言われ、多くの女性の共感を呼んだと言われながらも、前2作においてブリジットは反フェミニスト的存在そのものという批判があったことを、再度思い出させるような批判が今回も出てくる。ガーディアン紙のモーアは、“Why I hate Bridget Jones” というタイトルがそのまま内容を示すような記事で、なぜブリジットを自分は嫌いなのかを反フェミニストという観点から説明する。ブリジットは、「今まで以上に、気の抜けた消費者で、自分のことに取りつかれている³⁴⁾」から、「この反フェミニストの小説は買わない³⁵⁾」、「過去の20年間のフェミニズムを背後に、ブリジットは、自立を誇示し、実際には、酔っぱらう、女友達を大事にし、彼女らと性的欲望をあからさまに話題にする自由を示しているだけ³⁶⁾」、「ブリジットは、私を笑わせるかもしれない、でも、ブリジットの抱える混乱を笑うのは私には無理である。強い自立した女性であることのブリジットのレトリックからくるユーモアは、いつも彼女の偽りの神経症でいつのまにか害されている、男性からの電話音を

³²⁾ What Fielding always did best was use modern frustrations to fondly lampoon a particular sort of vanity and pretentiousness that secretly everyone has. (Come on, what's the first thing you remember about Chechnya?) She still does. Such as when Jude says: “Bridget. Sleeping with a 29-year-old off Twitter on a second date is not ‘Rather like in Jane Austen’s day’.” (“Bridget Jones: Mad About the Boy by Helen Fielding-Review,” *The Independent*, October 13, 2013)

³³⁾ “The comic cultural references still hit home, except when the culture she references is Bridget Jones. The themes are fascinating and she’s still funny. She should ignore the passes and keep trying.” (“*Bridget Jones: Mad About the Boy* by Helen Fielding-Review,” *The Independent*, October 13, 2013)

³⁴⁾ “Help, Bridget’s back. She’s a widow but she’s as vapid, consumerist and self-obsessed as ever. (“Why I hate Bridget Jones,” *The Guardian*, October 1, 2013)

³⁵⁾ “I don’t buy this anti-feminist fiction. (“Why I hate Bridget Jones,” *The Guardian*, September 30, 2013)

³⁶⁾ “Bridget’s much-vaunted independence, gained on the back of the feminism of the previous two decades, manifested chiefly as the freedom to get pissed, appreciate her female friends and speak openly of her sexual desires.” (“Why I hate Bridget Jones,” *The Guardian*, September 30, 2013)

待つこと、今やソーシャルメディアを見つけたから、メール着信音待ちで³⁷⁾、だから、「ポストフェミニズムは、実際は反フェミニズムではない³⁸⁾」というこの虚構は受け入れがたいとなる。

この反フェミニズムに基づく批判の記事に対して、賛否両論の書評と同じく、激しい反論もある。モーアの記事の文章にそのまま呼応して反論し、「フェミニズムとは、まさに、飲んで友達と酔っぱらう自由とセックスについて公然と話せる自由なのでは？³⁹⁾」そして、「女性は、これまで十分長く批判と期待にさらされてきたはず。ブリジットを批判するのは止めてほしいね。⁴⁰⁾」と結ぶ。

第三作においても、最後、ブリジットは、またもや素敵な男性と結ばれる。今までの2作と全く同じ展開である。もしも「その結末しか読者は喜ばない」と作者が仮定したゆえにそうなったのであれば、これは、確かに私も残念かもしれない。でも、私のそれは、反フェミニズムと名付ける必要さえないような、ささやかな理由からである。ブリジットが、新たな恋を探して、作者の書きたかったという数々の新しい試練を切り抜け、それでも恋愛には成功しなくて、一人で生きている姿を最後に示してくれても、それはそれで「私」は大丈夫だったと感じるからである。「成長せよ」と人は言う。だけど、結局のところ、「その成長」は、社会が、二児を持つ51歳の女性に求めている成長なのだ。人生を共有するパートナーがいないと寂しいと感じるブリジットが、素敵な男性を求めて、また必死の努力をし続けようとしたことは、自然なことのはず。そのためには体重の減少で「社会が定義する女子力なるもの」をまず上げようと思うのも当然なのだ。そして51歳の彼女には、それをすることがかなり大変なことも、「私達は分かる」のだ。同じ社会に十分長く

³⁷⁾ “Of course Bridget can make me laugh but her confusion didn't. Still doesn't. The humour that comes from her rhetoric about being a strong independent woman is always undermined by her pseudo neurosis – waiting for the man to ring or, now she has discovered social media, to ping.” (“Why I hate Bridget Jones,” *The Guardian*, September 30, 2013)

³⁸⁾ “Poor Ms Jones, still hiding her cleverness, putting up with crap from Cleaver and worrying about the competitive school run. Sorry, I am not buying this fiction. The fiction is that post-feminism is not in fact anti-feminism.” (“Why I hate Bridget Jones,” *The Guardian*, September 30, 2013)

³⁹⁾ “Surely Feminism as about having the choice to drink and get “pissed” with one’s friends and the choice to talk freely about sex,” (“News: Does Bridget Jones represent anti-Feminism?” *The Guardian*, September 30, 2013)

⁴⁰⁾ “Women have lived long enough under criticism and expectation...give Bridget a break!” (“News: Does Bridget Jones represent anti-Feminism?” *The Guardian*, September 30, 2013)

生きているのだから。だからこそ、最後に、求めた恋は手に入らなくても、ブリジットらしく人生を頑張ろうと前向きにさえ終わっていたら、長い月日を経て登場したブリジットは私たちにもっとエールを送ってくれるものとなれたはずなのに、と思うのである。それをさせようとは作者フィールディングが思わなかったこと、または、作者の目に入る私達女性がそう思わせなかったとしたのなら、それは残念に思われる。かつて、ブリジットの「自己決定権」は、異性に選ばれるためだけではないと信じたかった女性達は、彼女であれば一人で終わる結末も全く問題はないはずだと信じるし、信じたいからである。それは取りも直さず、一人で終わる結末に「私」が耐えられない程には弱くないと信じたいからである。

しかし、上述したような不満が私自身にはあるとしても、実は、30代から50代へ、夫の死を経ても変化しなかったブリジットは、女性達が意識する以上に、女性へのエールになっていると思うのである。不平等なコミュニケーションが存在する社会で、下位に置かれる構造の中で、「変わらずに生きる」ことができれば素晴らしいこと — これまた多くの女性が思っていることだからである。ブリジットの恋にまつわる努力が30代と同じものであるしかないことに対する女性ファンの憤りは、ブリジットではなく、社会に向けるべきなのだ。「50代、二児の母となった女性が、とても望めないと言われる恋愛を、自分らしさを変えることなく求め続けたのが、なぜ問題なのか」、「女性だけが、年齢に合った行動を取り、家庭での役割とともに成長する必要なんてないはずでしょう」と。「年齢相応に」「母親らしく」 — よく聞く言葉である。でも、この社会で、年配の女性と若い男性との恋愛は情けないことと思われ、母親としての資質を疑問視される一方、往々にして年の離れた若い女性との恋愛は男性が甲斐性のある証拠とされ、父親らしさがたとえ欠如しても大目に見られるような社会で、二児の母となっても、50歳になっても、ブリジットは「社会が求めるような成長」は見事に拒否してみせたのだ。むしろ今回彼女を批判した女性達が、年齢が進むとともに社会のステレオタイプに縛られて今は生きているのだともいえる。少なくとも、私は、彼女が「年齢相応に」「母親らしく」「成長していない」ことを、物語の魅力の減少の理由に決してしないだろう。認めるとしたら、今の社会では、彼女は、前ほどは女性達には「笑えないだろう」という客

観的な事実だけである。

この第三作の物語を最初から彼女たった一人で始めたことが示すように、人生を共にしている理想的な男性を失っても、主人公として自らの人生を絶えず自分で選択する「自己決定権」は結局自分にあることを示したこと、その選択した自分の信じる幸せのために、51歳のヒロインが、愛する人の「悲劇的な喪失」の後、「子ども二人」を抱えて、かつ若い頃と「変わらないまま」で、「恋を探して」ドタバタできるエネルギーを持っていること、そして、何よりも、そのアップダウンの人生の過程において、前2作の最大の魅力であった他者への悪意を示すことのない彼女のコミュニケーションを絶えず取り続けたこと — それらに対して、社会で男性と同じように活躍しながら、それでも、男性の側に都合よく「女子力」を評価されながら生き続けなければならない女性達は、前作以上にブリジットにエールを送るべきかもしれない。前2作で、日記で社会のステレオタイプの中で揺れ動く心情を吐露しながら多くの女性の共感を呼んだブリジットは、第三作では、実は社会のステレオタイプ自体によってはほとんど揺れ動いていないのだ。そういう意味では、彼女は、30代の時より比べものにならないほど強くなったのだから。

第三作の刊行でインタビューを受けたフィールディングは、昔、第一作のプロモーションツアーにおいて訪れた東京で、司会者の若くてスタイルのよい美しい日本人女性から、「私はブリジットに共感している」と言われたというエピソードを紹介し、社会が自分にあるべき姿として期待することと自分が内面で感じていることのギャップが、彼女のブリジットへの共感にあるのだろうと言っている⁴¹⁾。そして、こう続けている。

I wonder where the perfect Japanese presenter is. I bet her life didn't turn out like she expected, any more than Bridget's — and I hope that, like Bridget, she will be managing to keep buggering on, play with the cards she is dealt, and laughing with her friends, who will tell her that she's absolutely fine — just as she is.⁴²⁾

⁴¹⁾ “But I suspected that what Bridget had unwittingly tapped into was the gap between how people feel they are expected to be on the outside and how they actually feel inside.” (“The Bridget Jones effect: how life has changed for the single woman,” *The Guardian*, December 20, 2013)

⁴²⁾ “The Bridget Jones effect: how life has changed for the single woman,” *The Guardian*, December 20, 2013.

作者が第三作刊行で語ったブリジットなるものの第一作からの条件は、結局のところ、「人間らしく、温かい心を持ち、寛容である」ことだったように、「ブリジットの生き方」は、望むのであれば決して女性達にとって難しくないはずである。これこそがブリジットに共感した多くの女性への一番のエールなのかもしれない。

10. 2025年の映画が示すこと

2025年2月、2013年に出版された *Bridget Jones: Mad About The Boy* の映画が公開された。2013年の発刊時は、物語の展開の是非を問う記事の洪水にあらためてブリジットの人生が気になっている人の多さを再認識したが、この2025年の映画公開時にはすでに何が起きるのかについて人々が知っているためか、映画の展開自体を論じている記事はあまり見かけなかった。それでも映画公開前後に出てきた多くの記事や米国のTV番組での原作者と主演女優へのインタビュー等、映画を楽しみにしている者が多くいることは明らかであった。映画自体は原作通り、二人の子どもと生きるシングルマザーの51歳のブリジットが新たなロマンスを求め、そこでも相変わらずの勘違いとドタバタが続く。映像作品によく見られるように原作からのいくつかの変更はあるが、ストーリーライン自体はほぼ同じである。興行的には成功といえたこの映画の出来については、厳しい評価も存在する。映画で恋愛相手となる男性達とブリジットの相性がいいように見えない⁴³⁾、人気シリーズのエンディングとしては残念な出来である⁴⁴⁾などの酷評もある。一方で、映画に満足している⁴⁵⁾、悲哀や過去を捨て去ることなく幸せになろうとする彼女は女性への強いエ

⁴³⁾ “there is so little chemistry between each of the two lead pairings they resemble a panda being forced to mate with a flamingo” (Bridget Jones: Mad About the Boy review – giant laughs for Hugh Grant but weepie sequel I strangely dazed” *The Guardian*, Feb. 12, 2025.)

⁴⁴⁾ “In short, the Bridget Jones cinematic universe has lost its edge.” (“Bridget Jones: Mad About the Boy’ Review: Gimmicky Fanfiction for the Middle-Aged and the Middle Class” *COLLIDAR*, January 12, 2025.)

⁴⁵⁾ “Four years on, Bridget is older, wiser, sharper, funnier and marginally less dependent on pratfalls to deliver laughs. All of which means that this, the fourth film in the series based on Helen Fielding’s beloved creation, is the most satisfying and unexpectedly touching Jones outing since the first movie. (“Bridget Jones: Mad About the Boy review – our hapless heroine is sharper, wiser and funnier” *The Guardian*, Feb 16, 2025)

ールとなっている⁴⁶等の好意的な批評もある。結局、2013年の第三作を批判した人々は映画にも不満だろうし、30年前の最初の小説の出版からのファンや25年前のシリーズ最初の映画公開からのファンは映画館に行っただろう。マークとのクリスマスの回想、マークを象徴する白いフクロウー小説で示されたブリジットの強い喪失感と寂寞は、映画では映像のためにより強く印象付けられるともいえる。一方で、その映画の最後では、彼女の人生に登場してきた、彼女を愛する人々がみな集う。監督が意図としたという「私達もまたブリジットの仲間とその部屋と一緒にいるような気持ちができる⁴⁷」、そうした賑やかなパーティシーンで終わる映画は、日記の記載でブリジットの今を知る原作のエンディング以上にブリジットを愛するファンを幸せな気持ちにさせたことだろう。

映画の公開前、米国NBC局の朝の報道番組 TODAY のゲストとしてフィールドイングと映画の一作目からブリジットを演じているレネー・ゼルウィガーが登場した。司会者の一人、ディラン⁴⁸が “Bridget is so relatable.” と何度も口にする中、フィールドイングがゼルウィガーはまさにブリジットそのものだと言う。その時の彼女の説明は以下のようなものだった。

She is so sweet and kind and loving to everyone.
But inside she is strong and resilient and good.⁴⁹

⁴⁶ “She understands that you don’t have to be defined by the past; nor do you have to discard it completely. And surely that also applies to all women—real and fictional—who refuse to be written off before they’ve finished what they’ve got to say.” (“The beloved film franchise reflects Hollywood’s current obsession: women who are determined to survive,” *BAZAR*, February 14, 2025) “Bridget has filled a whole room with people who love her, just as she is. Bridget Jones and the women who refuse to be discarded.” (“Bridget Jones Mad About the Boy surprised me,” *ABC Entertainment*, February 14, 2025)

⁴⁷ 映画監督のモーリスはインタビューで映画の最後のシーンについて以下のように述べている。“So to me, was just really important to surround Bridget with her real family, her sort of biological family, and all of her chosen family, and just see that we’re part of them with the way the camera moves through that party. We are in the party with them;” “I really wanted the feel of this to be, we’re part of Bridget’s life, we’re part of Bridget’s family, and vice versa, so that you’d go forward at the end of this film, sort of knowing that she going to be okay. She’s where she should be.” (“Inside the ‘Bridget Jones: Mad About the Boy’s Ending & ‘Powerful’ Nod to Mark Darcy” *Swoon*, February.13, 2025)

⁴⁸ ディラン自身は、既婚、3児の母親。成功した有能かつ魅力的な女性と形容される人物だろう。

⁴⁹ “Renee Zellweger, Helen Fielding talk new chapter of ‘Bridget jones’” (Today NBC Feb.14, 2025)

「誰に対しても暖かく、優しく、愛情深い、しかし、内面は、強くて、快活で、善良なのである」と。この説明は一作目の若いブリジットにそのまま当てはまる。映画の批評に、「変わらないブリジットに最も共感した⁵⁰⁾」、また、「ブリジットの成長を見せたというよりも、いかに彼女が人間的であるのかを示した⁵¹⁾」というのがあるのも当然なのである。結局、原作でも映画でもブリジットは 30 年の間変わることはなかったのである。言い換えれば、ブリジットは女性達の共感を得るために変わる必要はなかったとのである。

おわりに

ブリジット・ジョーンズのシリーズはまだ続くのかについて、フィールディングは曖昧な返事をしている⁵²⁾。そうだろうとは思ふ。終わりにしても読者が納得できるようなエンディングであった一方、ブリジットへの変わらぬファンの共感を見たら、作家が続編を考えたとしても不思議ではない。もしもブリジットの続編が書かれたら必ず話題になるだろう。30 年前の原作を読んだ時から、または 25 年前の映画を見た時からブリジットを愛してきた人々はきっと読むだろう、そして見るだろう。ブリジットの持っている力はそこにある。女性達はブリジットに共感し彼女を選んでいく人生を気にかけているのだ。ブリジットは 30 年もの長きにわたって同時代を生きる現実世界の女性達の共感を失うことなく「変わらないままで」生きることができたという点で稀有な虚構世界の女性なのである。

⁵⁰⁾ “What’s so real to me about her is not her messiness but her childlike personality, even after all these years. You really don’t see women like that on-screen very often. They always have to “grow up.” “Those are both really good points and totally true. She doesn’t become a different person as a result of having different life experiences/being forced by virtue of having kids, losing a partner, etc., to become more responsible. She’s still just the same silly billy she always was.” (“Bridget Jones is still a Lovable Mess,” *The CUT*, Feb. 14, 2025.)

⁵¹⁾ “it’s less that Bridget Jones has finally matured, and more that she’s shown us how human she really is.” (“Bridget Jones 4 breaks UK box office rom-com record,” *BBC*, February 17, 2025)

⁵²⁾ So we may never know that for sure, but could there be another Bridget Jones book and film? “Never say never,” Fielding adds. (Renee Zellweger: ‘Fingers crossed’ this is not the end of Bridget Jones.” *BBC*, January 30, 2025)

コロナ禍における英語学習と留学：2名のライフストーリー

山 川 健 一

Abstract

This study analyzes the life stories of two university students who studied abroad in the United States after their study-abroad program had been postponed for more than a year due to the COVID-19 pandemic and who spent three months there during the pandemic. Drawing on interview data and adopting a narrative approach, the study examines how studying abroad during the pandemic is positioned within each participant's broader life story, including their histories of English learning and orientations toward study abroad. Although both participants were enrolled in the same department, whose curriculum requires study abroad, they constructed markedly contrasting meanings of their study-abroad experiences. Moreover, the pandemic exerted a substantial influence not so much during the period abroad as during the pre-departure preparation phase.

1. 序 論

外国語学習者にとって、その言語が話されている国や地域に留学することは、自身の人生を変えるくらいの大きなライフイベント (life-changing experience) である (Benson et al., 2012; Norris & Gillespie, 2009)。その言語を用いて社会的・文化的に現地で過ごすことは、その言語の学習にとって理想的な環境¹⁾であり、本国での言語学習よりも実際大きな学習効果があると一般に広く信じられている (Arvidsson, 2023)。

日本における留学政策は、2000年代後半までほぼインバウンドのみの留学政策であったが、内閣官房、グローバル人材育成推進会議 (2011) の「グローバル

¹⁾ Davidson (2010) は、これを「浸透神話 (osmosis myth)」と呼んでいる。

人材育成推進会議「中間まとめ」において「グローバル人材」の概念²⁾が定義され、この時期以降、高等教育機関においてもグローバル人材育成を念頭に置いた教育内容の構築は主要な課題の一つとなった（西山・平畑編, 2014; 徳永・靱井, 2011; 横田・小林編, 2013 など）。グローバル人材を構成する3つの要素を育成するためにも、留学は非常に重要な手段となり得る。日本学生支援機構が行った2023年の調査では、2019年の日本人学生の留学生数は107,346名であり、「グローバル人材」が謳われ始めた2009年頃の36,302名と比較すると約3倍もの増加が見られる（文部科学省, 2025）。

上述した留学の重要性にもかかわらず、2019年末に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、留学プログラムは世界的に大きな打撃を受けた。WHOは2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」を宣言し、3月11日にCOVID-19を「パンデミック」と位置づけた。その後、各国・地域で出入国制限等が拡大し、外務省は2020年3月25日、全世界を対象に危険情報レベル2を発出し、不要不急の渡航の自粛（中止）を要請した。

こうした状況を受け、文部科学省は2020年3月16日付の通知で、感染症危険情報レベル等を踏まえつつ、新たな渡航について慎重に検討することや、現に海外に滞在する学生について一時帰国を含めた安全確保策を検討することを大学等に求めた。日本人学生の留学生数は2019年度の107,346名から2020年度には1,487名になり、前年比で98.6%も激減した（文部科学省, 2025）³⁾。その後、文部科学省は2021年6月15日付通知において、大学間交流協定等に基づく1年間（実際の派遣期間9ヵ月以上）の留学プログラムについて、学生の安全確保等を前提に再開する方針を示した。

²⁾ これは主に、(1) 語学力、コミュニケーション能力、(2) 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、(3) 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの3つの要素からなると定義された。

³⁾ その後、2021年度は10,999名、2022年度は58,162名、2023年度は89,179名にまで回復した（文部科学省, 2025）。

2. コロナ禍が留学に与えた影響に関する先行研究

この時に留学を中断して帰国した日本人の留学学生⁴⁾に関する調査報告としては、Allen & Ramonda (2023), 近藤他 (2020), Landsberry (2024), Landsberry & Kato (2022), 中野他 (2020), 高柳・安 (2021), 渡部・末松 (2021) などが挙げられる⁵⁾。これらの研究では、途中帰国した留学学生に関して様々な否定的な影響が報告されていた。例えば、旅行や人との交流の機会の制限、学習意欲の低下、不十分な語学能力、リモート学習時の機器トラブル、また、急遽帰国する際に航空券の手配やホテルでの自己隔離などの予定外の出費、大学の対応(情報提供の不足など)への不満などがあった。加えて、留学再開を希望しても目途が立たず、その後の就活との兼ね合いから再留学に悲観の見通しを持つ場合や、自分の将来のキャリアの変更を強いられる場合、単位取得などの学業に関する不安を持つ場合があった。その一方で、肯定的な側面としては、短い期間であっても留学を体験できたことや、リモート授業の方が発言しやすかったこと、人的交流の「量」は減ったが、ホストファミリーなどの少人数の交流の「質」は向上したこと、大学からの手厚い支援があったことなどが報告されている。

上述した先行研究のうち、近藤他 (2020) と中野他 (2020) では、留学を控えていた留学学生が留学延期となったケースも含まれていた。そのような学生は留学を継続して希望している一方で、コロナ禍終結の先行きが見えない中で進路設計や学業に不安を抱いていた。

次に日本の外に目を向けると、コロナ禍が留学に及ぼした影響については既に研究が蓄積されており(例えば、Bista, 2022)、多くの包括的なレビュー論文

⁴⁾ 本論では留学中および留学予定の学生を総称して「留学学生」と呼ぶこととする。

⁵⁾ Allen & Ramonda (2023), Landsberry (2024), Landsberry & Kato (2022) は英語圏、高柳・安 (2021) は韓国、渡部・末松 (2021) は北米、欧州、アジアなどへ留学した学生を対象にしている。近藤他 (2020) と中野他 (2020) では、留学先は特に言及されていない。これら 7 つの研究はどれも、コロナ禍が発生した直後の緊迫した状況下における留学(予定)生の経験について焦点を当てたものである。またこれらとは別であるが、北野・内藤 (2022) では世界各地に留学中の学生がコロナ禍発生と同時に、安全確保や帰国・滞在の判断を突然迫られた時の試行錯誤の体験記が報告されている。

が発表されている。まず全般的な特徴については、Almadadha et al. (2025) がある。ここでは26件の論文に基いて統合的レビュー (integrative review) を行い、留学学生が直面した課題と対処戦略 (coping strategy) について報告している。また、Wang & Liu (2024) では、留学学生がコロナ禍で受けた様々な課題について78件の論文の系統的質的合成 (systematic qualitative synthesis) を行い、5つのテーマを報告している。

その他に、コロナ禍が留学と関連する特定の側面に及ぼした研究も多く存在する。Akiba et al. (2024) の文献レビュー (literature review) では、コロナ禍が留学学生のメンタルヘルスに及ぼす影響を扱った論文50件についてテーマ分析 (thematic analysis) を行い、7つのテーマを報告している。Zayim-Kurtay et al. (2025) の系統的レビュー (systematic review) では、コロナ禍が留学学生の流動性 (mobility) に及ぼす影響について57件の論文をレビューし、留学先のコロナ政策が影響していることを指摘している。Sin et al. (2025) では、留学学生の留学先での社会的・文化的統合について56件の論文に基づき系統的文献レビュー (systematic literature review) を行った。その結果、留学先政府の行動や教育機関の措置が重要であることと、統合に影響するテーマが6つ報告された。Roshid et al. (2023) の系統的文献レビューでは、高等教育や留学学生の流動性に関する留学先の教育機関や政府の考えについて31件の論文を調査し、問題点を指摘している。Almeida et al. (2025) の系統的文献レビューでは、48件の論文に基づき、パンデミックが留学生の社会的不平等にどう影響したかを調査した。その結果、個人、教育機関、政府の3つのレベルでの問題点を指摘している。Mihut et al. (2025) はコロナ禍が留学生の「労働市場 (就職やスキル習得)」に与えた影響に焦点を当てた35件の論文に対してスコーピングレビュー (scoping review) を行い、4つの面で負の影響を与えたと述べている。

これら8つの包括的レビュー論文で言及されていたコロナ禍のネガティブな影響の種類は、経済的障害 (帰国に伴う予想外の出費など)、心理的障害 (メンタルヘルスなど)、社会的障害 (現地での人的ネットワーク形成など)、(言語) 学習の障害、将来の職業選択可能性への障害、オンライン授業への不慣れ、現

地での人種差別などであり、上述の日本人留学生を対象とした研究と大差はなかった。

以上の海外の研究と比較すると、日本において、または日本人を対象にしたコロナ禍における留学学生の研究が圧倒的に少ないということがわかる⁶⁾。加えて、既存の研究はコロナ禍が原因で途中で留学を断念して帰国した留学学生や（例えば、Heinzmann et al., 2023）、留学予定の学生が留学できない状態、またはリモート学習に移行した状態の研究が多い。留学前にコロナ禍をある程度経験し、その後コロナ禍の中で留学を開始した日本人留学学生に関する研究はほとんど見受けられない。よって本論では、日本人英語学習者がコロナ禍発生時に日本で留学を控え、その後コロナ禍がまだ続く最中に英語圏への海外留学を果たしたケースを探求するために、ライフストーリー・インタビューを用いた質的研究を実施した。

3. 調 査

3.1 調査目的

本調査では、コロナ禍において約1年以上の留学延期後、アメリカに留学し、現地で3ヵ月を過ごした大学生2名の帰国後のインタビューデータを基に、コロナ禍での留学（延期と短縮を含む）がそれぞれの英語学習史と留学志向を含めた人生の語りの中でどのように位置づけられているかを検討することを目的とする。

3.2 調査方法

3.2.1 留学プログラム

調査対象の留学プログラム（以後Pと呼ぶ）は、私立α大学⁷⁾の英語英米文

⁶⁾ 日本では、コロナ禍に日本国内に留学中であった外国人留学生に関する研究が多い（例えば、黄, 2022 など）。

⁷⁾ 日本学生支援機構の調査（2023, p. 3）によると、コロナ禍の2021年度に留学を再開した日本国内の大学の中では、α大学は18番目に派遣留学生が多かった（プログラムPともう一つの別学科のプログラムを合わせて計154名）。

学科の留学プログラムである。P は 2025 年時点で約 35 年の歴史を持ち、学科所属学生は 2 年次後期に「全員」がアメリカの 2 大学 (X と Y) から留学先を選び、現地家庭にホームステイをしながら約 5 ヶ月間留学をするプログラムである。現地での成績に基づき、最大 16 単位が α 大学の卒業単位に認定される。X 大学と Y 大学とは 2016 年から新しく提携が始まった。学生はバスや自転車を用いて通学し、2016 年度より前は禁止されていた自由な旅行も認められるようになった。授業は現地大学の English Language Institute (ELI : 留学生向け英語教育部門) で、英語能力のレベル別に分かれて他国からの留学生と共に受ける。

X 大学では放課後は毎日、現地学生も含めた何らかの文化的交流活動が企画されている。Y 大学では Conversation Partner ⁸⁾ の制度や現地の日本語を学習している学生との自主的な交流会がある。X 大学が位置する市は人口約 6 万人の大学街であり、人口の半分近くが大学関係者であると言われている。学生は自転車またはバスで通学する。Y 大学は人口約 30 万人の市に位置する。学生はバスを乗り継いで、多くはダウンタウンを経由して通学するようになる。

以上のような 2 大学のプログラム情報やそれぞれが位置している場所の情報は、学生が 1 年次末に留学先大学を選ぶ前の段階、ならびに出発前の 2 年次前期に週 1 コマ開講されるオリエンテーション等において学生には詳細に提供されている。

このような形態で留学プログラム P は順調に運営されていた ⁹⁾。しかしながら、2019 年 12 月に初めて新型コロナウイルス感染症が確認されてから、瞬く間に世界中に感染が拡大した。2020 年 3 月 31 日、外務省は米国を含む 49 か国・地域について感染症危険情報をレベル 3 (渡航中止勧告) に引き上げ、4 月 1 日時点でレベル 3 は 73 か国・地域となった。この状況を受け、当該学生が 2

⁸⁾ この制度は、希望する学生は ELI に登録している現地の様々な専攻の正規学生と原則週 1 回約 2 時間程度の会話の時間を持つことができるものである。

⁹⁾ コロナ禍が始まるまでは、X 大学と Y 大学の他に、カナダの Z 大学にも学生を 2016 年度から 4 年間派遣していた。しかしながら、コロナ禍で留学が再開される際の諸条件に折り合いがつかず、Z 大学への派遣はその時点から休止になっている。

年次後期の2020年8月以降から始まる予定であったPは、同年6月に延期が決定され、翌年度の3年次前期に先送りとなり、急遽2年次後期と3年次前期のカリキュラム変更が行われた。しかしながら事態は収束を見ることなく悪化が続き、2020年12月に第2回目の延期が決定となり、2021年度の3年次前期のPの実施は再度見送られることとなった。2021年度の3月（2022年3月）には学生の就職活動が始まる関係上、これ以上の延期は不可能となった時に、世界的にコロナワクチンの接種が始まり、状況は一気に好転した。2021年6月15日、文部科学省は「日本人学生の海外留学について（周知）」を通知し、大学間交流協定等に基づく1年間（実際の派遣期間9ヵ月以上）の留学プログラムについて、学生の安全確保を前提に再開方針を示した。また、Pの通常の5ヵ月間滞在のためのビザ発行が不可能であったが、ビザなしで滞在できる90日以内の滞在が可能となった。これらにより、留学プログラムPの内容は一部変更されたが、7月に正式に留学実施が決定された。

その結果、①留学期間が5ヵ月から3ヵ月に短縮した、②授業数減少のため、認定される単位は16単位から10単位に減少した、③感染予防のため現地での私的旅行は一切禁止となった、④それまで継続的に受給を受けていた日本学生支援機構の海外留学支援制度（協定派遣）の奨学金は、留学期間の短縮やレベル3での派遣のためなくなった、⑤通常は配置しないが、コロナ感染の緊急の場合を想定して留学期間中は2大学それぞれに α 大学関係者を1名滞在させた、⑥コロナ禍の中で健康不安を抱える場合は留学せずに日本にとどまるという選択を学生に与えて、全員留学ではなく「希望者のみの留学」にした、という6つの大きな変更を行った。最終的に、当該学生全体の116名のうち、101名がX大学（47名）とY大学（54名）に分かれて留学することになった。

以上のように、留学の延期・再開と一口に言ってもそれほど単純ではなかった。その間は非常に多くの不確定要素の中で何度も新たな判断を重ねては変更し、その中で関係者、とりわけ当事者の学生は不安・焦燥・怒り・諦めなどの感情と向かい合いながらの1年3ヵ月の延期期間であった。

3.2.2 調査対象者とデータ収集

本調査の対象者の募集に当たっては、Pに参加した101名全員に参加を呼びかけ、賛同した9名（X大学4名、Y大学5名）を対象に、帰国後9ヵ月以上経過した4年次の2022年10月から11月にかけて、事前に調査内容の承諾を得たうえで半構造化インタビューを実施した。9名の書き起こしの逐語録を精読し、①英語学習史から留学後の振り返りまでの時間的連続性が語られていること、②留学延期と再開への自身の対応が具体的に語られていること、③留学中の出来事が多くの側面から語られていることを最も満たす事例を候補とした。その上で、語りの具体性（エピソードの密度）と、英語学習と留学への考え方が対照的である点を重視し、2名を主事例として選定した。調査協力者の2名（それぞれAとB）のうち、AはX大学に留学し、BはY大学に留学した。

3.2.3 データ分析

本研究はコロナ禍による留学の延期・短縮を経験した学生2名の語りをもとに、英語学習史と留学経験が人生の中でどのように意味づけられてきたのかを描写する。上述のインタビュー音声の逐語録を精読し、英語学習史、留学志向、大学選択、延期期間の対応、留学中の生活、留学中のターニングポイント、帰国後の振り返りに関する語りを抽出した。次に、語りの断片を出来事の時系列に沿って再配置し、引用を根拠として各参加者のライフストーリーを再構成した。最後に、2名のストーリーを比較し、コロナ禍と留学がそれぞれの語りにもどのように位置づけられているかを検討した。

ライフストーリーを用いた研究はまだ歴史が浅く、決まった研究方法はないが（桜井,2012）、本論では、中尾（2021）、桜井（2012）、高松（2015）、やまだ（2000,2007）を参考に、ライフストーリーを「個人の『生きられた経験』(lived-experience)について有機的に組織して意味づける行為であり、語り手と聞き手によって協

働生成¹⁰⁾されるダイナミックなプロセス」¹¹⁾と定義する。

4. 結 果

本節では2名のライフストーリーを、①英語との出会いと英語学習の軌跡、②留学準備期の留学延期への対応、③留学での生活の3つの観点から記述する。

4.1 学生 A (X 大学) のライフストーリー

4.1.1 英語との出会いと英語学習の軌跡

学生 A¹²⁾と英語との出会いは公立小学校の高学年の外国語の授業であった。ネイティブスピーカーの教師が来る時もあったが、当時の学校の雰囲気が悪く、そもそも勉強が嫌いで英語にも興味がわかず、「ただ授業にいればよいくらいの気持ち」だった。それが中学校でも続いたが、中学2年になってマウントを取りたがる仲の良い友人に馬鹿にされ悔しくなり、そこから勉強をし始めた。しかし英語は全く好きになれず、理系科目に注力した。当時はランキングで姉の高校より「下には行きたくない」と考えており、最終的に姉と同じ公立高校

¹⁰⁾ 語り手と聞き手の相互行為からストーリーは産み出されるというのは「構築主義 (constructivism)」の考えであり、世界やいわゆる「事実」というものは全員に同じ客観的な姿で立ち現れる「外部世界」ではなく、それぞれの認識主体によって構成されるとする立場である (中尾, 2021)。

¹¹⁾ ライフストーリーと類似した用語に「ナラティブ」がある。ナラティブは、「語る (語り)」という言語行為と「語られたもの (物語)」としての産物 (物語) を含意するとされている (桜井, 2012)。また形式面では、ナラティブは「筋・プロット」を通じて複数の出来事がつなげられ、一つのまとまりをもって区切られる言語形式であるとされている (森岡, 2013)。ライフストーリーとナラティブの違いについて、やまだ (2000) は「物語る行為には、ナラティブ (narrative) という語も広範囲に使われる。ライフストーリー研究はナラティブ心理学と総称され、より大きい範疇ではナラトロジーともいわれる。ストーリーとナラティブは互換的に使われる。」 (pp. 16-17) と述べている。また桜井 (2012) は、ライフストーリーの方がより静的なイメージが強いている。また、もう一つの類似した用語に「ライフヒストリー」がある。桜井 (2012) は、ライフヒストリーは描かれる人生が時系列的に編成され、オーラル資料の他に、自伝、日記、手紙が利用され、「事実」を伝えるという考え方が伴っていると述べ、研究の関心は個人の人生や生活にあるのではなく歴史叙述にあるとしている。

¹²⁾ A は自分の性格について「真面目で負けず嫌い」と描写している。

の一つに「やっとたどり着けて」合格できた。

高校でも英語は不得意科目だったが、高校2年からの理系の英語クラスで一番成績の良いクラスになった。その時の英語の教師は教え方は上手であったが、「教室の空気が悪くなるほど」大変厳しく皆が恐れるほどであった。恐怖感から毎日3~4時間予習で英語を勉強するようになった。おかげで英語の成績は上がり、「怖い先生のおかげでちゃんと基礎から勉強して、結果できるようになった」。大学受験では最初は建築系への進学を考えていたが、建築は男社会であるという考えの父親に反対され断念した。祖母が英語の先生ということもあり、また自分の英語の成績も良くなっていたということもあり、高校3年生の時に英語の教員を目指すようになった。親は国公立を希望していたが、センター試験の結果を見て断念し、Aがもともと興味のあったα大学へ進学した。

大学入学後は、「習っていること自体は、めっちゃ簡単だな」と思い、英語関係の授業にはそれほど難しさは感じなかった。高校3年で英検2級の1次試験に合格し、大学1年次で2級の2次試験に合格した。そして2年次に準1級に合格し、留学前の3年次のTOEICで725点を取得した¹³⁾。この時の英語力の根拠として、「(高校の時の)先生のおかげ」で「基礎ができるようになっていた」からとしている。ただし、インタビューではここに至るまで一度も「英語が好き」という肯定的な表現は出ていない。

4.1.2 留学準備期の留学延期への対応

新型コロナウイルスが最初に確認された2019年12月は、奇しくも留学先の希望アンケートが行われていた大学1年次の冬であった。Aは最初はY大学を選択していた。「田舎」のイメージがあったX大学よりも「都会っぽいところ」というイメージのY大学に「大学に入る前からそのときにもうY大学に行こう」という気になっていた。入学時は、「早く留学に行きたい」と思いつつ、「こ

¹³⁾ 大学2年生で準1級に合格するのは、α大学の例ではかなり早いと言える。

んなに英語しゃべれんのに行っていいのかな」という不安もあったが、「楽しみの方が大きかった」。

コロナ禍が始まり長い不安な未確定の状態が続き、漠然と留学には「行けないのかな」と考えていた時、2年次6月にα大学からPの第1回目の延期が決定された。これに対しては、「でも、もうわかっていたじゃないですか。そんなショックでもないし、ですよ、ね、くらいの気持ちで。むしろ行きたくもないじゃないですか、ちょっと怖いし。逆に時間が経つにつれて、行きたくなくなったんですよ。日本でいいやみたいなの」という気持ちであった。3年次7月に正式に留学実施が決まった時には、「めっちゃショックでした。多分、誰よりも喜んでなかった」と感じた。理由は、「自分は英語にもともと興味があって、先生になりたい」という目的で入学したが、海外の歌や映画なども含めて「もともと海外に興味があったわけじゃなかった」、加えて既に英検準1級も取得していたので、「英語学習はもう十分かな」と考えていた。しかし、このような機会はもうこの先一生ないと父親に強く説得され、「ほぼ強制」のような「行かなくてはいけない」という気持ちで参加を決定した。留学先は「どこでもよかった」が、当時仲の良かったグループの他の4人全員が最終的にX大学を希望したので、「せめて友達がいる方が楽しいと思って」X大学に変更した。

留学延期中の英語学習については大学入学後からずっと同じで、「(学習意欲は) 特に変わらず、ずっと上がることもなく、下がることもなく、最低限のことはするというつもりで」いた。入学時に将来目指していた英語教員については、2年次後期で断念した。その時は「留学に行きたくない気持ち」があり、また「海外が好きではない」という自分のモチベーションでは、過去の自分が出会った教師と比較した時、教師は「無理だな」と判断した。これはコロナ禍の有無とは関係なく同じ結論になっただろうとAは述べている。この違和感の原因としてAは、「別に英語じゃなくても、他にも資格取れる仕事って存在するじゃないですか。自分は結構、資格にこだわっていたんですよ。そのときは。将来一人で生きることを想像した時に、自分でずっと働ける仕事って、結局、資格持っておいた方が強いじゃないですか。一人で生きる力が欲しいなと思っ

て。それは昔からで、人に頼らず自分で生きていける力が欲しいなと思って。自分でずっと思っていました」と述べている。

Aは大学2年次で英検準1級に合格するというその高い英語力から、出発直前の結団式においてX大学代表の英語スピーチ学生に選出された。しかしこれについても、「なんでそもそもこんな留学行きたくない人」がスピーチをしなくてはならないのかと感じていた。「基本的に最低限のことはするんですよ、常に。でも勉強したいかって言われたら、常に勉強はしたくないというか。英語が嫌いっていうか、留学に行きたくないので、英語は嫌だみたいな。英語に触れたくない」という考えであった。

4.1.3 留学での生活

留学が始まり、Aはダブルステイ(ハウスメイトは仲の良いグループの一人)であったが、留学の最初の一日が過ぎて早々に二人ともホストチェンジとなった。ホームステイの契約では留学生には個室が与えられることになっているが、ホスト宅に到着してみると別の留学生が一名個室に滞在しており、残った一つの部屋をAたちがシェアするようにホストに言われたのが原因であった。加えて、その留学生の家の使い方が非常に不衛生でかなりのショックを受けた。

新しいホストファミリーは、ナースをしているシングルマザーと3人の子ども(11歳と4歳、2歳)で、ホスト経験は初めてであった。別のところに住んでいるグランドマザーも、時々家に来る子どもの父親も、「みんないい人」であった。週末は、グランドマザーの家に行ったり、Aのα大学の友人と遊びに行ったりする過ごし方であった。ただし、Aは他人に気を遣う性格で、加えて他人の生活音が苦手であったので、同じグループの友人とダブルステイになったことは「最初は嬉しかった」が、「結構しんどかった」という。唯一良かったのは、その友人は自分と「モチベーションは同じくらい低く」、差がないことは良かったと述べている。

留学前はあまりホストのことは考えておらず、「海外に行く、ということしか考えてなくて、人と生活するというのはあまり考えていなかった。自分が想像

してなき過ぎて、こういうことなんだなみたいな。(留学を)旅行の長いバージョンぐらいの気持ちで」考えていたと述べている。

そのような中でも、Aには留学中の「ターニングポイント」があった。α大学の自分の友人がアメリカでナンパされた話が面白くてそれをホストマザーに伝えようと会話した時に話が盛り上がり、「今まで『ホスト』って感じだったけど、仲良くなれた感じがして」、業務的ではなく初めて「英語できちんと何かを伝えたい、英語を話していて楽しい」と思った唯一の瞬間であった。

コロナ禍の影響については、X大学はコロナ対策に敏感で大学で毎日健康チェックをしており、マスク着用が徹底していたので、留学中の新型コロナの影響についてはAからはほとんど言及がなかった。この理由についてAは、「旅行には行きたかったけど、最低限はみんな遊べてますもんね」という認識であった。ただ帰国前の時に、ホストファミリー全員がコロナ陽性の疑いが出たのに隔離をせずに普段通りの生活を家の中でしていた。学生は帰国する際は陰性証明書が必要で、陽性の場合、他の学生と一緒に帰国できなくなる可能性があったので、Aはそのことを非常に恐れていた。最終的に、Aとハウスメイトは最後の一週間はホテルに滞在することにしたので、最後のホストとの別れは非常にあっけなく終わった。

大学の授業は英語能力別に3つに分かれていて、Aが一番上のクラスであった。例年ならクラスに他国の留学生もいるはずだったが、実質α大学の学生のみであった。Aは授業についていけないわけではなかったが、クラスの他の学生が積極的であったのでモチベーションの低い自分とのギャップから、「(英語を)ますます、どんどん嫌いになりよるんかなぐらいの気持ち」であった。しかし、Aはリスニングに関しては滞在中から向上しているという実感を感じていた。帰国後のTOEICは100点上がって825点であった。

4.2 学生 B (Y 大学) のライフストーリー

4.2.1 英語との出会いと英語学習の軌跡

学生 B¹⁴⁾と英語との出会いは、A と同様、公立小学校の高学年の「外国語」の授業であった。ネイティブスピーカーの教師が来る時もあったが、当時は珍しいだけで特に英語への興味はなかった。中学 1 年のときに母親の勧めで近所の英会話学校へ週 1 回の通学を始め、高校からは受験や英検対策の内容も追加して週 2 回になり、高校卒業までの 6 年間続けた。そこでは文化的イベントも開かれ、楽しむことができた。中学と高校を通して、水泳、テニス、ダンスと幅広く課外活動に注力していたが、中高を通して英語が一番好きであり、「英語のテストだけは、ほんまに毎回満点を目指すっていう気持ち」であった。中学 3 年の進路選択の頃から「英語を使う仕事に就きたいと思っていたので、外資系の企業だったり、海外に住むのもいいな」と漠然と考えていた。中学 1 年の時の母親の最初の誘いがなければ特に英語と関わるようなことはなく、一生懸命勉強する科目の一つでしかなかった。大学受験は親からは国公立を期待され、国際関係の学部を志望していたが、不合格となった。中高時の英会話学校でニューヨークの話を聞いた際にアメリカに強いあこがれを抱いていたので、全員がアメリカに留学する α 大学に進学した。

大学入学後は念願の α 大学のダンス部に加入し、1 年次 11 月の大学祭のステージで踊った後に、ようやく国公立の受験失敗を精神的に乗り越え、「本当にここ (α 大学) に来てよかったなっていう風に思えたので、そこからガラッと変わって、すべて (α 大学が) 大好き」になった。これと並行して留学準備も着々と進めていた。アルバイトで留学資金を貯め、早めに運転免許も取得しておいた。英語学習についても、日常会話を中心に本やインターネットで勉強していた。

¹⁴⁾ B は自分の性格について「好奇心旺盛、外に出たがる、何事にも全力でやるストイック」と描写している。

4.2.2 留学準備期の留学延期への対応

2年次6月に第1回目の留学延期が決定された時は「最悪」と思ったが、インフルエンザのように、あと2ヵ月くらいしたらコロナ禍は終息すると考えていた。留学が本当になくなるとは全く思っていなかったので、2年次前期は普通に留学準備をしながら生活していた。2年次12月に第2回目の留学延期が発表されたときも、「もしこれ以上伸びたら、本当に行けなくなるんじゃないかとひしひしと感じて。でもまだ3年生になる頃にはコロナはなくなってるだろう」と考えて、3年次後期の留学にまだ希望を持っていた。しかし1回目の延期から並行してモチベーションが次第に落ちていき、もし留学がなくなるのだったら、「今ある楽しい可能性をつかみに行こうと思ひ」、バイトで貯めたお金をダンス活動につぎ込むようになった。

その後、3年次7月に留学実施が決定された。その時は「嬉しい気持ちと、お金をどうしようという気持ちが半分半分」であった。また海外が初めてだったということもあり、入学時はできていたのに留学延期で弱くなった「心の準備を立て直す」必要があった。また、熱心に取り組んで流れに乗っていたダンス活動を中断して留学することになるので、ある種の「寂しさ」もあった。

留学先は1年次末の段階では、(前年度まで派遣していて結局は派遣不可能となった)カナダのZ大学を希望していたが、留学再開となって再度の希望調査の時には、念願のニューヨークに近いという理由と、仲の良い友人が全員Y大学希望だったという理由でY大学を選んだ。出発の4日前に開催された3年次の大学祭のダンス部のステージを終え、急遽留学準備を始めて、その時に初めて留学する実感が沸き「すごく楽しみになって」きた。

4.2.3 留学での生活

留学が始まり、50代のホストマザーが一人の家庭にダブルステイすることになった。ハウスメイトは安田では別のクラスの学生で、全く知らない学生であった。マザーは今回ホスト経験が初めてであった。マザーの職業はガラスモザイクアーティストであったが、ホストをする期間はホスト業に集中するために、

仕事はせずずっと自宅にいてくれた。マザーには成人した子どもが3人いるが、夫とは学生が来る半年前に別居状態となり、精神的に弱っていた。食事の時も学生たちの前で毎回夫の話になり、泣くことが多かった。しかし学生たちが「日本が恋しくなってカルチャーショックにならんように（特に食事に）めっちゃ気を付けてくれたし、すごく優しくていい人」だった。その後、1ヵ月たったくらいからマザーは安定してきた。マザーはBたちが希望すれば、近場なら車で連れて行ってくれたが、基本的に人込みを嫌って外に出ないタイプだったので、遊びに誘ってくれることがなかった。よって、Bは大体は自分たちでバスを利用して外出していた。

マザーとの生活でのカルチャーショックは食事であった。毎週チーズのみの大きなピザが注文され、3人で3日間かけて食べることが続いた。またマザーはベジタリアンだったので、学生たちは肉料理を切望していた。ただしBは、「全部文化として受け入れよう、違いとして受け入れようと思って行ったので、それも楽しみつつ、辛かったけど」と思って受け入れた。

マザーはユダヤ教であり、学生が通常イメージするクリスマスの行事は家庭では行わなかった（その代わりにハヌカ（Hanukkah）が行われた）。ホストから「クリスマスはやらない」と言われたとき、「ええっと思って。やってくれたらいいじゃんって。ケーキがあるだけでもいいのに」と思い、このことはBにとっては非常にショックな出来事であった。友人宅でクリスマスを過ごす可能性も探してみたが、多くの家庭ではコロナ禍での感染を気にしていたので不可能であった。この時初めてホームシックを経験した。

Bの留学中のターニングポイントは、留学当初11月末ごろに、ホストの娘の同級生で以前しばらくホスト宅に住んだこともあった男性（現在は女性として生きている）が訪問してきて2週間程度滞在したことであった。この人物は明るい性格で、ダンスがBと共通の趣味ということで意気投合した。早口なのでゆっくり話してもらい、「ようやく会話が成立する」程度であったが、「十分に言葉がしゃべれなくても、一緒に楽しい時間が過ごせるんだ」と感じた。「とっかかりは何でもいいんだ」と気づき、「コミュニケーションの最初の一言を出す

のが軽くなったというか、心が軽く」なったと感じた。この経験のあと、マザーに依存せずに自分でいい店を探したり、友達と出かけたりするようになり、「視野が広がった」。

コロナ禍の影響については、マザーは学生たちがワクチン接種済なので、どこへ行くにも「行ってらっしゃい」という感じで、ホスト宅にも「ワクチン打っている人だったら、呼んでもいいよ」というスタンスであった。ただコロナ禍にもかかわらず、B大学の地域はA大学の地域よりも全般的にマスクをしない率が高かったので、外出については「コロナを気にして（スポーツ観戦などに）行けなかったりしたのが不満というか、後悔というか、悔しさ」があった。Bは濃厚接触者になったことがあったが、結局ホスト宅の3人は全員コロナ感染はしなかった。

授業については、レベル別に3つに分かれており（Bが一番上のクラス）、クラスが全員同じα大学の学生だったにもかかわらず、「レベル的にもちょうどよかったし、すごく楽しくて充実」していた。「大学で習った英語を家でアウトプットできる環境」が非常に心地よく、自分の成長を「目に見えて感じて」いた。

現地の大学関係の活動にはあまり参加しなかったが、現地の同年齢の女性の **Conversation Partner** と大変良い関係を築くことができ、ほぼ毎日連絡を取り合っていた。この学生はアメリカで生まれ育っているが、両親は日本人で、英語も日本語もできるバイリンガルであったので、コミュニケーションで困ることはなかった。一方で、現地でBが自分で開拓した人間関係については、「声掛けられないですし、話し掛けたとしても、三言くらいで終わるので、現地の他の友人はできなかった。

最後の1カ月はオミクロン株の猛威の影響でリモート授業になった。しかし、リモート授業は多少のテンポの悪さはあったが、課題もしっかりと出され、たくさん話す必要があったので「(対面授業と)あまり変わらない」と感じた。最終的に、授業も含めて現地の大学生活には「不満はなかった」。帰国後はまだ英検準1級には合格していなかったが、TOEICは85点上がって665点であった。

5. 考 察

5.1 学生 A と学生 B のライフストーリーの要約

A にとっての留学は、コロナ禍との戦いでもなく、ホストと楽しく過ごす時間でもなく、英語力を伸ばす絶好の機会でもなかった。また、A にとって英語とは自分がある時点で得意になった「科目」であり、将来生きていくための何らかの「資格」になる「可能性」であった。A の「もともと英語が好きだったわけじゃなくて、多分、英語ができただけで好きだったわけじゃないんですよ、別に」の発言が物語るように、英語学習は内発的動機づけ (intrinsic motivation) とは結び付いていなかった。そのことに A 自身もすでに留学前から気づいており、それゆえ「留学延期」を喜んだ。留学中も自分と英語との否定的な関係について「再確認」する日々であった。真面目で負けず嫌いな性格から、やることは最低限こなしてきたので、留学前後の英検や TOEIC で好成績を残すことができた。しかしこれらは、A の英語学習への更なる動機づけになるものではなく、自分の英語学習を終了させるきっかけになり得る「免罪符」であった。思えば、英語と留学に向かい合うきっかけも、外部の働きかけやきっかけがあつてのことであった。中学校の時のマウントを取る友人への反抗心、父親の強い反対で建築専攻をあきらめてからの英語専攻の選択、友人に合わせた留学地の選択、「留学に参加しない」という選択肢があつたが再度父親の強い説得で参加した今回の留学、という外部要因である。A にとって留学は、そのような自分と英語との関係性について、否が応でも直視して再認識させてくれる機会となったのである。

B にとって、英語は「好き」の対象であった。中学 1 年からの英会話学校で英語と英語圏の文化に触れ、中学生の時から将来の進路は「英語を使う仕事」であった。ニューヨークに憧れ、留学プログラムを有する大学へ進学した。コロナ禍の中でも、特に悲観はしておらず、いつかは留学に行けると信じていた。2 回の留学延期の先が見えない中で、留学へのモチベーションが少し下がったが、「英語が好き、留学に行きたい」という自分の「軸」はぶれなかった。留学中は、コロナ禍のため感染を心配して行動範囲が狭まったり、大好きな英米

文化の大きな行事であるクリスマスパーティーがホスト宅でなかったことなども大きなショックであったが、優しいホストマザー、英語力の伸長を感じられる日々の授業、毎日連絡を取り合うほど仲の良い **Conversation Partner** などに恵まれ、満足のいく留学となった。また日々の生活のふとした瞬間の中で、心を軽くしてコミュニケーションを取ればよいということや、人の生き方の多様性に気づき、他人と違うことをしてもよいという考え方の存在にも気づくなど、単なる個別の体験に終わらない新しい学びを得ることができた。

5.2 学生 A と学生 B の比較

同じ大学の同じ学科に入学して同じコロナ禍に別々の大学に留学した A と B であるが、そのプロセス全般は非常に対照的である。両者ともまじめな性格であり、英語学習に取り組む姿勢は表面的には同じなのであるが、A にとって英語は「将来の資格となりえる自分が得意な科目の一つ」である一方、B にとっては純粋に「好き」の対象であり、「将来の職業の中心」に位置づけられていた。大学選択においては、 α 大学は両者にとっては第一希望ではなかったが、A は父親から専攻を建築から英語へ「変更」するよう説得されて選択した大学であるのに対し、B は同じ英語・国際系の分野という面では「変更なし」で選んだ大学であった。留学先を選ぶ際は A も B も友人関係を重視した選択であったが、最終的には A は当初希望していた Y 大学ではなく X 大学に留学した。コロナ禍で留学が延長になったときも、留学の延期を喜ぶ A と、留学の再開をあきらめずに望み続ける B という対照的な違いがあった。そして最終的に留学再開が決まったとき、行きたくない気持ちを引きずる A は、留学がますます楽しみになっていた B とは全く異なっていた。留学中は、他人と比較しながら「英語が好きではない」自分のポジショニングを日常的に確認する A と、留学が自分の日々の英語学習にどのように貢献しているのかという観点で「毎日を楽しく」過ごす B で大きく異なっていた。

奇しくも二人にとっての「ターニングポイント」は非常に類似したものであった。ホストや友人とのたわいもない日常のふとした会話の中で、A は「英語

を話していて楽しい」と初めて感じ、Bは「十分に言葉がしゃべれなくても、一緒に楽しい時間が過ごせる」ことを発見した。

二人の英語力の比較であるが、留学前後でTOEICの得点は、Aが100点、Bが85点上がった。伸び幅はどちらもほぼ同じであるが、最終到達点が、Aは825点、Bは665点であった。

5.3 留学中におけるコロナ禍の影響

コロナ禍に関してAとBに共通していることは、留学中のコロナ禍の影響に関する語りがそれほど見られなかったことである。留学中には、コロナ禍で「何かができない」というよりも、コロナに感染してしまって「何かができなくなる」方を避けたかったのかもしれない。特に、そもそも留学を望んでいなかったAにとって帰国直前のコロナ感染は、待ち望んでいた「日本への帰国」を妨げる可能性のある「恐怖」であった。

またコロナ禍が言及されない別の理由として、Aが述べていたように、学生たちはコロナ禍でも、大学で英語を学び、放課後は毎日友人と好きな所に行き、ホストと日常生活を共にするなどの「通常的生活」を結局ある程度送ることができたからではないだろうか。別の言い方をすると、「コロナ禍」という「大きな文脈」よりも、「英語使用・友人・ホスト」といった学生の「個人的文脈」の方にはるかに大きな関心があったと言えるのかもしれない。

加えて、多くの先行研究とは異なり、本研究の参加者はコロナ禍の中で2年近く過ごしてから留学に旅立ったので、ある程度コロナ禍での立ち振る舞いや注意点に熟知していたことが原因の可能性もある。

コロナ禍の影響は、留学中よりも出発前の留学延期期間中の方が大きかった。その間、学生たちは不透明な混沌状態の中で、お金の準備、就活の準備、英語学習の動機づけの維持、勉強と趣味とのバランス、留学の実質的な準備などに向かい合う必要があった¹⁵⁾。AもBも留学実施の決定に対して全く異なるべ

¹⁵⁾ これらの点については、近藤他(2020)と中野他(2020)と同様の結果であった。

クトルの感情を持ちながらも、留学前の期間が最もコロナ禍の影響を受けていたと考えることができる。コロナ禍の影響は、留学中は「行動への制限」であるが、留学前は「将来の選択への制限」であったと言える。

5.4 教育的示唆と今後の課題

本論の教育的示唆として2点述べる。1つめは、学生の多様性への認識と留学後の評価についてである。留学を必修とする学科に来る学生は必ずしも一枚岩ではない。今回のAとBのように英語学習と留学に対する向き合い方が全く正反対のケースも存在することがわかった。よって、特に留学事前指導においては、学生個別の課題や不安のきめ細かい把握と対応が必要となるであろう。また、留学の「成果」は留学前後の英語テストの伸びで測定されることが多いが、今回のAとBのようにほぼ同じ伸長度でも、留学期間の過ごし方や「本人にとっての留学の成果」は全く異なる。また、留学終了時はAの方がTOEICで160点高かったが、得点が高い学習者が必ずしも満足のいく留学期間を送ったとは限らない。よって、留学後は語学面のみならず内面的変容についても見ていく必要があり、学生本人の振り返りのみならず何らかの客観的心理測定¹⁶⁾も同時に用いていく必要があるだろう。

2つめは、今回のコロナ禍では留学プログラムは多大な影響を受けたが、今回の調査で判明したことは、「コロナ禍の中の留学の不便さ」よりも、出発前の「不明瞭で情報がない状態の不便さ」の方がはるかに大きな影響を学生に与えたということである。もちろんコロナ禍においては誰も確かな情報は持ち合わせていなかったし、それは不可能であった。しかし、教育機関として確かな情報のみを発信するのではなく、不安に思う学生に対して何らかの「ケア」がもっと必要であったかもしれない。つまり、教育機関の「制度的・組織的な対応」と「学生の感情に対する対応」は、正解が必ずしも一致しないということを念

¹⁶⁾ 例えばBEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) などがある (Shealy, 2016)。これを用いた研究例については、例えば山川 (2023) を参照のこと。

頭に置き、今回のコロナ禍のような特殊な場合における学生への対応を考える必要がある。

今後の課題としては、今回取り上げなかった他の調査参加者7名も含めて、それぞれのライフストーリーを構築し、コロナ禍の留学に関して新たな特徴を見出すことが挙げられる。加えてテーマ分析 (thematic analysis) も行い、共通点や特徴の類型化を行う必要があると考えられる。

6. 結 論

留学はその期間だけに起こる出来事なのではない。それまでに生きてきた人生、そして留学後に描く未来と重なっている。過去は未来に制限を与え、未来は過去を躍動させる。その逆もしかりである。そして留学研究は過去を発見する手助けとなり、未来を切り開く道標になる。この意味で、ライフストーリーは「パランプセスト」(三代,2015,p.18)¹⁷⁾である。留学での経験を、過去と未来も含めた「ライフストーリー」に変換することで、留学中の出来事や感情の「意味」を聞き手の調査者のみならず、語り手の学生自身も再発見することができる。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 18K00769 の援助を受けた。また、本調査に協力してくれた学生の皆様に深く感謝する。

参 考 文 献

- Akiba, D., Perrone, M., & Almendral, C. (2024). Study abroad angst: A literature review on the mental health of international students during COVID-19. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 21(12), 1562. <https://doi.org/10.3390/ijerph21121562>
- Allen, T. J., & Ramonda, K. (2023). Study abroad during a pandemic: The impact of

¹⁷⁾ パランプセスト (palimpsest) とは、重ね書きされた羊皮紙のことであり、本論では三代 (2015) の解釈とは少し異なり、「留学を含めた過去の経験が完全に消えることなく現在の意識の底に層をなして残っている人生の経過の様態」をイメージしている。

- remote learning and social distancing on student experiences. 『関西大学外国語学部紀要』 28, 93-108. <https://doi.org/10.32286/00028118>
- Almadadha, L., Gholizadeh, L., & Sheppard-Law, S. (2025). COVID-19-related challenges and coping strategies among international students: An integrative review. *Journal of International Students*, 15(10), 85-114. <https://doi.org/10.32674/q045mk90>
- Almeida, J., Netz, N., Nika, D., Krzaklewska, E., Aguiar, J., Botezat, A., França, T., Jokila, S., Streitwieser, B., Vigdís Guðmarsdóttir, R., & Malet Calvo, D. (2025). The impact of the Covid-19 pandemic on social inequalities in international student mobility: A scoping review. *Comparative Migration Studies*, 13(1), 27. <https://doi.org/10.1186/s40878-025-00436-0>
- Arvidsson, K. (2023). Studying abroad during and before the COVID-19 pandemic: A comparison of target language use and self-reported linguistic progress. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*, 8(1), 1-23. <https://doi.org/10.1075/sar.21029.arv>
- Benson, P., Barkhuizen, G., Bodycott, P., & Brown, J. (2012). Study abroad and the development of second language identities. *Applied Linguistics Review*, 3(1), 173-193. <https://doi.org/10.1515/applirev-2012-0008>
- Bista, K., Allen, R. M., & Chan, R. Y. (Eds.). (2022). *Impacts of COVID-19 on international students and the future of student mobility: International perspectives and experiences*. Routledge. <http://doi.10.4324/9781003138402>
- Davidson, D. (2010). Study abroad: When, how long, and with what results? New data from the Russian front. *Foreign Language Annals*, 43, 6-26. <https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.2010.01057.x>
- Heinzmann, S., Hilbe, R., Bleichenbacher, L., & Ehrsam, K. (2023). Returning to a new normal: Social and mental adaptation of study abroad returnees during the first wave of the COVID-19 pandemic. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*, 8(1), 50-75. <https://doi.org/10.1075/sar.21037.hei>
- 北野真帆・内藤直樹（編）（2022）。『コロナ禍を生きる大学生』 昭和堂
- 黄美蘭（2022）。「新型コロナウイルス感染症による大学生活における不安と抑うつ—中国人留学生の場合—」 『異文化間教育』 56, 60-78.
- 近藤佐知彦・石倉佑季子・中野遼子（2020）。「学校および留学生・日本人学生が直面した留学交流に関する令和 2 年の課題（4 月末から 5 月にかけてのアンケート調査報告）」 『グローバル人材育成教育研究』 8(1), 70-76. https://doi.org/10.34528/jagce.8.1_70
- Landsberry, L. (2024). Japanese university students' perspectives on the COVID-19-driven cancellation of their study-abroad program. *Journal of Worldwide Education*, 16, 3-18. <https://doi.org/10.37546/JALTSIG.SA.JOWE16.1-1>
- Landsberry, L., & Kato, A. (2022). Study abroad interrupted—A Japanese student's perspective and experience—. 『桜花学園大学保育学部研究紀要』 26, 127-132. <https://ohka.repo.nii.ac.jp/records/374>
- Mihut, G., Cullinan, J., Flannery, D., Palcic, D., Souto-Otero, M., Wiers-Jenssen, J., Anabo, I. F., Kasza, G., Perez-Encinas, A., & Bin Qushem, U. (2025). International student mobility, Covid-19, and the labour market: A scoping review. *Comparative*

- Migration Studies*, 13(1), 11. <https://doi.org/10.1186/s40878-025-00426-2>
- 三代純平 (編) (2015). 「序 日本語教育学としてのライフストーリーを問う」 『日本語教育学としてのライフストーリー —語り聞き、書くということ』 (pp. 1-22) くろしお出版
- 文部科学省 (2025, 4月30日). 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について https://www.mext.go.jp/content/20250430-mxt_kotokoku02-000027891_1.pdf
- 内閣官房, グローバル人材育成推進会議 (2011). 「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/_icsFiles/afiedfile/2011/08/09/1309212_07_1.pdf
- 中野遼子・石倉佑季子・近藤佐知彦 (2020). 「COVID-19による日本人学生の派遣留学への影響」 ウェブマガジン『留学交流』 112, 30-43. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2020/_icsFiles/afiedfile/2021/02/18/202007osakau.pdf
- 日本学生支援機構 (2023). 「2021(令和3)年度日本人学生留学状況調査結果」 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2023/02/date2021n.pdf
- 西山教行・平畑奈美 (編) (2014). 『グローバル人材再考』 くろしお出版
- Norris, E. M., & Gillespie, J. (2009). How study abroad shapes global careers: Evidence from the United States. *Journal of Studies in International Education*, 13(3), 382-397. <https://doi.org/10.1177/1028315308319740>
- Roshid, M. M., & Seraj, P. M. I. (2023). Interrogating higher education's responses to international student mobility in the context of the COVID-19 pandemic. *Heliyon*, 9(3), e13921. <https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2023.e13921>
- Shealy, C. N. (Ed.). (2016). *Making sense of beliefs and values: Theory, research, and practice*. Springer Publishing Company.
- Sin, C., Tavares, O., Apsite-Berina, E., Borràs, J., Bulut-Sahin, B., Chrančoková, M., Czerska-Shaw, K., Devlin, A. M., Heinzmann, S., Jokila, S., Kéri, A., Lešević, I., Magliacane, A., Nicolaou, A., Onder-Ozdemir, N., Perez-Encinas, A., Raikou, N., Soule, M. V., Valanciūnas, D., Voda, A. I., & Zayim-Kurtay, M. (2025). The impact of COVID-19 on the social and cultural integration of international students: A literature review. *Comparative Migration Studies*, 13(1), 7. <https://doi.org/10.1186/s40878-025-00425-3>
- 高柳有希・安龍洙 (2021). 「COVID-19が韓国留学中の日本人学生の留学生活に及ぼす影響の一考察」 『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 4, 107-118. <https://doi.org/10.34405/00019719>
- 徳永保・靱井圭子 (2011). 『グローバル人材育成のための大学評価指標』 協同出版
- Wang, Y., & Liu, J. (2024). The impact of COVID-19 on international students: A qualitative synthesis. *British Journal of Educational Studies*, 72(6), 805-829. <https://doi.org/10.1080/00071005.2024.2374077>
- 渡部由紀・末松和子 (2021). 「新型コロナウイルスの留学への影響と留学支援の課題—東北大学の事例—」 『東北大学高度教養教育・学生支援機構 紀要』 7, 91-99. <https://hdl.handle.net/10097/00131220>
- 山川健一 (2023). 「海外留学プログラムにおける学生の変容: BEVIを用いた分析」 『大学英語教育学会 中国・四国支部研究紀要』 20, 55-72.

- 横田雅弘・小林明（編）(2013). 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 学文社
- Zayim-Kurtay, M., Kaya-Kasikci, S., Kondakci, Y., Bulut-Sahin, B., Kéri, A., Levatino, A., Marinoni, G., Ovchinnikova, E., Öz, Y., Sin, C., Weber, T., & Qushem, U. B. (2025). Im/mobility in a disruptive time: The impact of Covid-19 on the size and directional flow of international student mobility. *Comparative Migration Studies*, 13(1), 15. <https://doi.org/10.1186/s40878-025-00431-5>

執筆者紹介

- | | | |
|---------|----------------|----------|
| 杉 山 正 二 | (英語学) | 岡山理科大学教授 |
| 青 木 克 仁 | (認知意味論) | 安田女子大学教授 |
| 青 木 順 子 | (異文化コミュニケーション) | 安田女子大学教授 |
| 山 川 健 一 | (英語教育学) | 安田女子大学教授 |

学会活動報告

1 2025 年度講演会

11 月 13 日 (木), 7102 教室において講演会が行われた。講師は広島大学
名誉教授 新田玲子。演題は「私のアメリカ文学研究から見えた世界」

2 2025 年度研究発表会

12 月 10 日 (水)

1 「私の研究人生」—My Research Journey—

安田女子大学 教授

Taras Alexander Sak
(司会 青木 順子)

2 欧米語とカタカナ語

安田女子大学 教授

松岡 博信
(司会 青木 順子)

投稿規定

- 1 会員による英語学、英米文学、英語教育学、異文化理解などに関する未発表の論文であること。
- 2 本論集は安田女子大学 文学部 英語英米文学科のホームページ上で公開し、著者には印刷物を2部寄贈する。
- 3 投稿書式設定と提出ファイル形式は以下の通りとする。
 - ・Microsoft Word 互換のソフトウェア(docx ファイルのみ)として保存し、PDF ファイルと共に編集長宛てに email で投稿する。
 - ・用紙サイズは A5 とし、余白は上左右各 15 ミリ、下 10 ミリ、文字数と行数を、文字数 35 文字、行数を 29 行に設定する。
 - ・本文を日本語で書く場合のフォントはMS明朝 (10 ポイント)、英語で書く場合は Times New Roman (10.5 ポイント) の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。
 - ・題目 (12 ポイント・ボールド) は、2 行目から書き出し、センタリングする。サブタイトル (12 ポイント) は、題目の 1 行下に入れ、センタリングする。
 - ・著者名 (12 ポイント・ボールド) は、題目の後に 1 行スペースを空けて記入し、センタリングする。
 - ・Abstract (10 ポイント) は、著者名の後に 1 行スペースを空けて書き始める。
 - ・Abstract は、日本語であれば 400 字以内、英語であれば 200 語以内とする。なお、abstract のタイトル部分のみ太字 (ボールド) とする。
 - ・本文は、abstract の後に 1 行スペースを空け、セクションの題目 (10.5 ポイント・ボールド・センタリング) を挿入した後から書き始める。なお、セクションの数字は 1 から始めることとする。1.1.のようなセクションの下位項目の題目 (日本語 10 ポイント・ボールド、英語 10.5 ポイント・ボールド) は、左詰めにする。
 - ・論文の長さは、注、図表、参考文献などを含めて 10 から 20 頁とする。
 - ・引用、参考文献などの書式は、それぞれの分野に応じたものを用いる。
 - ・注 (9 ポイント) は脚注とする。
 - ・投稿時には完成した原稿を提出し、校正は確認用の PDF ファイルを一度送ることで最終とする。

附 則

- この改正規定は、平成 5 年 6 月 1 7 日から施行する。
この改正規定は、平成 9 年 6 月 1 9 日から施行する。
この改正規定は、平成 1 4 年 6 月 2 0 日から施行する。
この改正規定は、平成 2 2 年 5 月 1 3 日から施行する。
この改正規定は、平成 2 5 年 6 月 1 7 日から施行する。
この改正規定は、平成 3 0 年 7 月 1 2 日から施行する。

安田女子大学英語英米文学会会則

- 第1条 本会は安田女子大学英語英米文学会と称する。
- 第2条 本会は英語学・英米文学・英語教育学を中心とする学術的研究とその啓発を目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- 1 研究会・研究発表会・講演会等の開催
 - 2 機関誌の発行
 - 3 その他必要と認められる事業
- 第4条 本会は次の会員および準会員で組織する。
- 会員
- 1 本学英語英米文学科専任教員
 - 2 本学大学院英語学英米文学専攻の在学生
 - 3 その他、本会の主旨に賛同し、入会を希望して評議員会の承認を受けた者
 - 4 会員は本会主催の行事に参加すると共に、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことができる。
- 準会員
- 1 本学文学部英語英米文学科の在学生
 - 2 準会員は本会主催の行事に参加することはできるが、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことはできない。
- 第5条 本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会の発展に貢献が認められた本学退職教員の中から役員会の推薦を受け、評議員会の承認をもって決定される。
- 第6条 本会に次の役員を置き、役員会を組織し、事業の運営にあたる。
- 1 会長
本学文学部英語英米文学科長を充てる。
 - 2 運営委員
教員 若干名、互選により選出する。
 - 3 会計監査
(ア) 教員 2名、互選により選出する。
(イ) 大学院生 1名、互選により選出する。
- 第7条 本会に次の評議委員会を置き、評議員会を組織し、事業計画の審議、会則の改正、監査報告の承認等を行う。評議員会は会長が召集する。評議員会は年1回以上開催する。
- 1 本学英語英米文学科専任教員
 - 2 大学院生 1名、互選により選出する。
- 第8条 評議員会は、構成員の過半数の出席をもって成立する。委任状はこれを認める。会則の改正には3分の2以上の賛成を要する。

第9条 役員は年度初めに選出し、評議員会において審議のうえ、承認する。役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本会の会員の会費は年額3,000円とし、毎年度初めに納入する。ただし、大学院生会員の会費は年額1,500円とする。2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。また、準会員の会費は無料とする。

第11条 本会は事務局を本学文学部英語英米文学科事務室内に置く。

第12条 本会の会則の施行に関する必要な事項は別に定める。

第13条 本会は平成3年4月1日に発足する。

施行細則

- 1 運営委員（教員）は幹事、書記、編集とする。
- 2 教員の委員は5名とする。
 - (ア) 幹事2名、書記1名、編集2名とする。ただし、幹事のうち1名は運営委員長を務める。
 - (イ) 会計は本会事務局（英語英米文学科事務室）の担当とする。
- 3 会費の納入は、以下のいずれかによるものとする。
 - (ア) 会計へ直接納入
 - (イ) 現金書留での郵送
 - (ウ) 学会口座への振込

附 則

この改正規定は、平成 6年5月19日から施行する。

この改正規定は、平成 8年6月13日から施行する。

この改正規定は、平成13年7月 5日から施行する。

この改正規定は、平成15年5月15日から施行する。

この改正規定は、平成22年5月13日から施行する。

この改正規定は、平成30年4月 1日から施行する。

編集委員 三宅 英文
島 克也

英語英米文学論集 第三十五号
2026年2月7日発行

発行者 安田女子大学英語英米文学会
代表者 松岡博信
広島市安佐南区安東 6-13-1

印刷所 株式会社 山菊